府中Ⅳ遺跡 第2次発掘調査概報

1996

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序 文

和歌山市は、本県の中心地であり、紀ノ川によって形成された和歌山 平野を中心に発展してきました。その肥沃な平野と紀ノ川の恩恵を受け、 古代より人々が住みつき、市域には数多くの遺跡が残されています。

中でも、今回発掘調査をいたしました府中IV遺跡は、平成6年に宅地造成のための土採り工事が行われた際、新たに発見された遺跡です。その時行われた調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居址が多数発見され、その頃の集落跡であることが明らかとなりました。

遺跡の調査は今回で2回目となります。今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡とともに、奈良時代や鎌倉時代、江戸時代に至る掘立柱建物跡も多数検出しています。また特に、方形の竪穴住居跡については、県下でも最大級の規模をもつものや、ベッド状の施設を伴う住居が発見され、当時の文化や竪穴住居の構造を考える上で、貴重な資料を得ることができました。このような新たな学術成果は、郷土の歴史を解明してゆくためには、なくてはならないものであります。本書が広く、私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにする一助になれば幸いです。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大のご協力をいただいた地元の皆様方および本書編集に種々ご教示を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成8年12月20日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 理事長 木 下 正 昭

例 言

- 1. 本書は、和歌山市府中字長通り313・314-2・315番地内において計画した分譲住宅地造成に伴う発掘調査概要報告書である。
- 2. 調査は、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約780㎡を1996年6月24日から同年8月14日までの約2ヶ月間で実施した。
- 3. 発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

教育長 坂口全彦 理事長 木下正昭 文化振興課長 志岐忠一 事務局長 竹尻圭吾 文化財班長 森田安信(平成8年7月まで) 総務課長 別院 稔 小松堉甫(平成8年8月から) 事務主任 酒井 剛(調査庶務担当) 学芸員 益田雅司 学芸員 栗本美香(発掘調査担当)

- 4. 遺跡・遺構及び本概報掲載の遺物写真撮影は井馬、栗本が行った。
- 5. 本書の執筆は発掘調査担当の井馬、栗本のほか同財団学芸員北野隆亮が分担し、編集は栗本が行った。各執筆分担については以下の目次のとおりである。
- 6. 写真図版の遺物に付した数字番号は、実測図番号に対応する。
- 7. 概要報告書の作成にあたり、多くの方々に現地及び遺物整理作業時に有益な御教示・御指導を 賜ったことに感謝の意を表します。
- 8. 発掘調査及び遺物整理に際して以下の方々のご協力を頂きました。記して謝意を表します。 池田隆 今山直美 上山華代 海野榮喜男 岡野恵津子 亀井稔 木村二朗 杉浦寛 田中新也 谷川弘治 土屋孝司 出縄豢子 上澤真喜子 冨加見百合子 藤田裕美子 三木康雅 水田久枝 宮崎英子 山岡久泰

本文目次

1.	. 調査	Fの契機と経過·····	(井月	馬好英)	1
2.	. 位置	建と環境⋯⋯⋯⋯	(栗)	本美香)	2
3.	. 府中	□Ⅳ遺跡の既往の調査		(井馬)	4
4 .	調査	その方法と経過		(栗本)	6
	(1)	調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			6
	(2)	調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			7
5.	遺構	<u></u>			8
	(1)	弥生時代後期から古墳時代前期の遺構			10
		$SB-1 \cdot SB-7$ (井馬) $SB-2 \sim SB-6$ (栗本)			
	(2)	奈良時代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		(栗本)	17
6.	出土	.遺物			17
	(1)	弥生時代後期から古墳時代前期の遺物			18
		SB-6出土遺物・SB-1出土遺物・SB-2出土遺物・SD-1出土遺物(井馬)			
		線刻のある土器(栗本)			
	(2)	奈良時代の遺物		(栗本)	22
	(3)	鎌倉時代の遺物	(北里	予隆亮)	23
	(4)	石器		(井馬)	23
	(5)	鉄 器······		(栗本)	25
7.	まと	め			25
	(1)	弥生時代から古墳時代にかけての府中Ⅳ遺跡周辺の集落消長について…		(井馬)	25
	(2)	府中Ⅳ遺跡検出の竪穴住居の構造と変遷について		(井馬)	26
	(3)	府中Ⅳ遺跡出土の塼について		(栗本)	28
3	据生主	· 炒台			99

図版目次

- 図版1 調査地遠景(北から)、調査前(西から)
- 図版2 全景(東から)、全景(西から)
- 図版3 東側試掘トレンチ全景(南から)、SB-2周辺(北西から)
- 図版4 SB-6(東から)、SB-6炉(北から)
- 図版 5 SB-4 (西から)、SB-3 (西から)
- 図版 6 SB-5(西から)、SB-5(北から)
- 図版7 SB-7(束から)、SB-7(北から)
- 図版8 SB-1(西から)、SB-1(北から)
- 図版9 SB-1炉(東から)、SB-1貯蔵穴(東から)
- 図版10 SB-1ベッド状遺構(西から)、SB-1ベッド状遺構(北から)
- 図版11 SB-1P-7(北から)、SB-1南壁溝(西から)
- 図版12 SB-2(南から)、SB-2炉内遺物出土状況(南から)
- 図版13 SB-2 P-1 遺物出土状況(上が南)、SB-2 P-2 遺物出土状況(上が東)
- 図版14 SB-2 土層堆積状況(西から)、SB-2 入口土層堆積状況(西から)
- 図版15 SB-8 (南東から)、SB-11(北から)
- 図版16 SK-2(北から)、SE-1(北から)
- 図版17 SB-6出土遺物
- 図版18 SB-1出土遺物
- 図版19 SB-2出土遺物
- 図版20 SB-2出土遺物、SD-1出土遺物、線刻のある土器、鉄器
- 図版21 SK-2出土遺物、SK-5出土遺物
- 図版22 石器

1. 調査の契機と経過

府中Ⅳ遺跡は、平成6年に当調査地の南側において宅地造成のための土採り工事が行われ、この 工事に際して多量の弥生上器を含む土層が断面観察により発見された。このため和歌山市教育委員 会が新発見の遺跡として文化庁に届け出を行い、周辺における遺跡の広がりを勘案し、周囲約 72,000㎡を府中Ⅳ遺跡(遺跡番号402)として周知の遺跡に指定した。この工事に伴った第1次調査 は財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行ったもので、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて の集落跡を検出している。

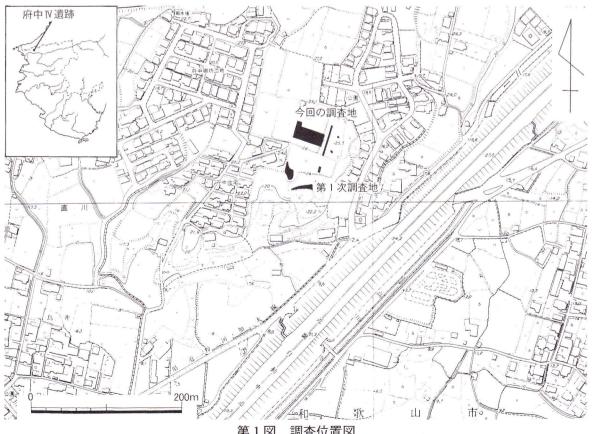
今回の調査は、第1次調査地の北側において分譲住宅地造成工事(開発面積約3,000m²)が行われ ることとなり、この工事に先立つ発掘調査が必要となった。このため和歌山市教育委員会が平成8 年5月7日にトレンチ調査による試掘調査(面積330m²)を実施し、広範囲にわたる遺構のプランを

検出した。その成果より協議が行われ本調査に至った。本調 査は、和歌山市教育委員会の指導のもと当財団が花枝農林株 式会社から委託を受けて実施した。この調査面積は試掘調査 範囲を含め780m°である(第1図)。

調査期間は、平成8年6月24日から同年8月14日である。 調査に際して、大型竪穴住居等重要な遺構を検出し、和歌山 市教育委員会が8月6日に記者発表を行い、次いで8月11日 に現地説明会を実施した(写真1参照)。



写真1 現地説明会風景



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は大阪府泉南郡岬町および阪南市、東は和歌山県那賀郡貴志川町、南は同県海南市、西は紀伊水道に隣接している。和歌山市の地形は、奈良県の大台ヶ原に源を発し、西進して紀伊水道に流れ込む紀ノ川(全長約136km)の南岸と北岸で二つに大きく分かれる。紀ノ川北岸では、本県と大阪府の府県境を和泉山脈が東西走し、山脈と紀ノ川の間には約3kmの幅で段丘および扇状地が展開する。南岸では、紀ノ川の堆積作用によって形成された沖積平野が広がり、平野部の南端を取り囲む形で竜門山系から派生したいくつかの丘陵が断続的に存在する。府中Ⅳ遺跡は、紀ノ川の河口から約9km上流、北岸の標高約25mの段丘上に立地する(第2図)。

紀ノ川北岸において周辺の遺跡を概観すると、まず縄文時代のものとしては、直川遺跡(23)、高井遺跡(25)、府中Ⅲ遺跡(30)、川辺遺跡があげられる。これらの遺跡は、縄文土器や石鏃が採集され周知の遺跡とされている。また特に、府中Ⅳ遺跡から東へ約2.8㎞のところに位置する川辺遺跡からは、縄文時代晩期の土器が多数出土したほか、土器棺墓等の遺構が確認されている。

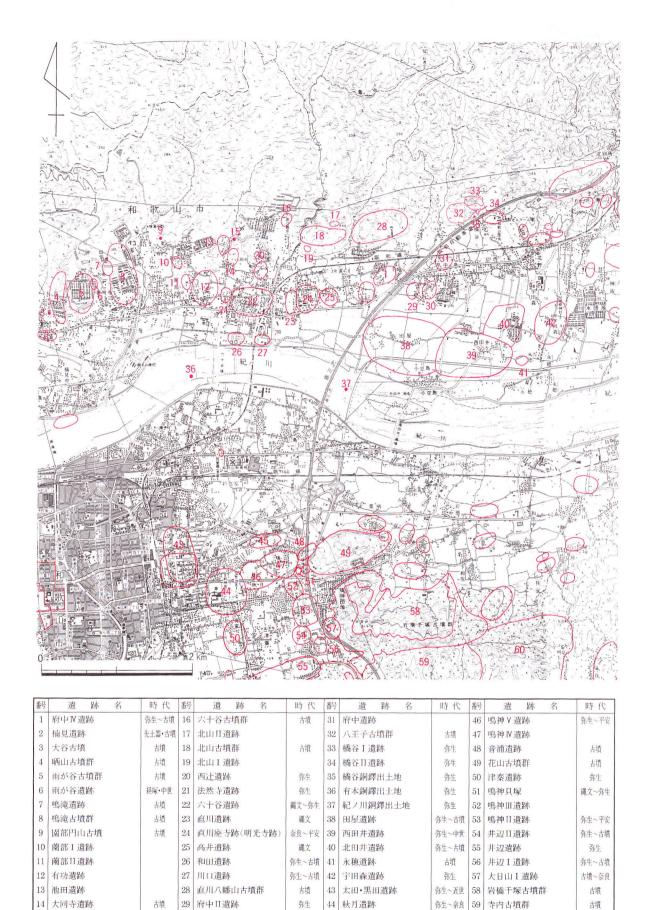
弥生時代においては、六十谷遺跡で弥生時代前期の土器が採集されているが、発掘調査は行われておらず、遺跡の実態は明らかにされていない。弥生時代の遺跡が本格的に営まれるようになるのは中期以降のことであり、宇田森遺跡(42)や北田井遺跡(40)などの集落遺跡が展開する。宇田森遺跡では、昭和42年に行われた発掘調査によって、中期の炉穴をもつ円形の竪穴住居とともに、竪穴住居を取りまく形で掘削された溝や、竪穴住居に隣接して土壙墓とみられる方形の土坑が検出されており、集落内の構造が窺える遺跡である。北田井遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居を中心に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居が確認されており、長期にわたって集落が営まれていたことがわかる。

弥生時代後期になると遺跡の数は増加し、その分布も広がりをみせる。後期初頭には橘谷 I 遺跡 (33) および橘谷 II 遺跡(34) など山間部にも遺跡がみられる。これらの遺跡は当遺跡から約 1 km北東 の和泉山脈から派生した丘陵上にあり、標高60~80mのところに立地する。発掘調査によって円形 の竪穴住居や空濠が検出されており、いわゆる高地性集落として知られている。平野部においては、田屋遺跡(38) や西田井遺跡(39) などの集落が、弥生時代後期から古墳時代全般にかけて連綿として営まれるが、これらの集落の中心は古墳時代中期になってからのことである。また、橘谷遺跡 や当遺跡から南へ約 1 kmに位置する紀ノ川の中州からは、後期のものとみられる銅鐸が出土している。

次に古墳時代になると、集落遺跡のほかに山間部に古墳が造られるようになる。古墳の築造は特に中期から顕著であり、丘陵上に数基から十数基の小規模な古墳群が形成される。古墳群を構成する古墳の数が少ないものの、大谷古墳(3)のように巨大な前方後円墳が築造されるのが特徴である。

歴史時代においての良好な遺跡は少ないが、遺跡から西へ約700mのところには直川廃寺(23)がある。伽藍遺構は発見されていないが、複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、創建時のものとみられる。また当地域は府中という地名が残されており、国府跡の所在地と推定されている。

[参考文献] 和歌山県史編さん委員会『和歌山県史』考古資料 和歌山県 1983 和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991 (脚和歌山県文化財センター『川辺遺跡発掘調査報告書』 1995



第2図 府中Ⅳ遺跡周辺の遺跡分布図

45 鳴神 VI 遺跡

古墳

60 山東古墳群

古墳

30 府中Ⅲ遺跡

古墳

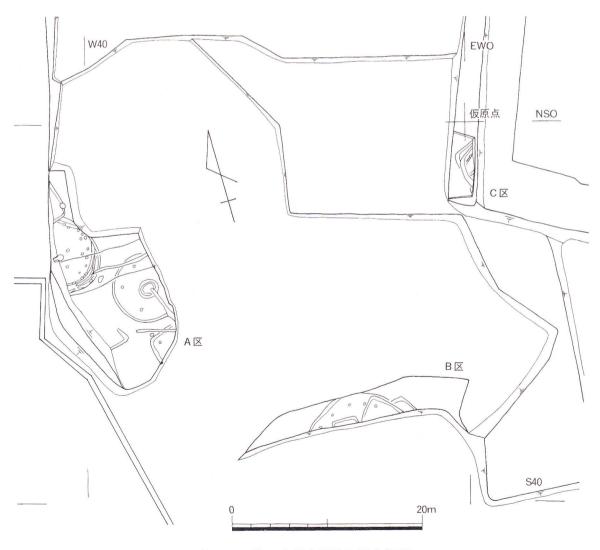
15 有功古墳

3. 府中Ⅳ遺跡の既往の調査

府中 IV 遺跡の第 1 次調査は、平成 6 年12月 5 日から19日にかけての約 2 週間の期間において財団 法人和歌山市文化体育振興事業団が実施したものである。調査地は今回の調査地の南側約50mに位置し、宅地造成のための土採り工事に伴うものであった。この調査は上採り工事現場内においてすでに壊された部分を除いた 3 ヶ所約200㎡を対象に実施した。現場の状況から調査地が 3 ヶ所に分かれていたことよりそれぞれA区・B区・C区とし調査区を設定した(第 3 図)。

この調査における基本層序は、各調査区によって多少異なるが基本的に表土の直下に約20cmの厚みで遺物包含層が堆積し、この包含層の下面がベース面である。このベース面が遺構検出面であり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構を全区画において検出している。遺物包含層の時期は弥生土器片や土師器片に混ざり中国製青磁鎬蓮弁文碗や瓦器片等を含むことから少なくとも鎌倉時代以降に堆積したものとみられる。

まずA区は他の調査区と比べ比較的標高が高く、遺構検出面での標高が約24.5mを測り、北側から南側へ緩やかな傾斜をもった地形をなしている。このA区で検出した遺構は、ほとんどが弥生時



第3図 第1次調査遺構平面全体図

代後期から古墳時代初頭のものであり、なかでも竪穴住居が多く占める。竪穴住居は古いものでは 弥生時代後期とみられる円形の竪穴住居2棟(建て替え及び拡張を含めると4棟)、古墳時代前期と みられる竪穴住居3棟(建て替え及び拡張を含めると4棟)を検出している(写真2参照)。

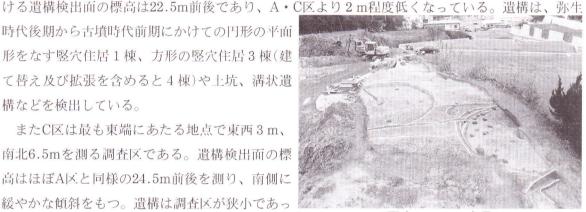
なかでも良好な資料は円形の平面形をなす弥生時代後期の竪穴住居である。この住居は、径7.5 mを測るもので周壁直下に床面からの深さ10cm前後を測る壁溝が巡るものである。また床面の検出 では住居のほぼ中央に擂鉢状の炉を検出し、この炉の周りには床而からの高さ10cm程度の周堤をも つ、いわゆる炉堤をもつものである。特に東側の住居には炉から南東方向に断面がV字形をした溝 状遺構が屋外にのびる。この住居の主柱穴を復原すると5本柱の住居であったことがわかる(写真 3 • 4 参照)。

次に、B区は最も南端に位置する調査区であり、東西25.6m、南北3.6mを測る。この調査区にお

時代後期から古墳時代前期にかけての円形の平面 形をなす竪穴住居1棟、方形の竪穴住居3棟(建 て替え及び拡張を含めると4棟)や土坑、溝状遺 構などを検出している。

またC区は最も東端にあたる地点で東西3m、 南北6.5mを測る調査区である。遺構検出面の標 高はほぼA区と同様の24.5m前後を測り、南側に 緩やかな傾斜をもつ。遺構は調査区が狭小であっ たため全体は不明であるが西壁がほぼ重なりをも つ3棟の竪穴住居を検出している。この3棟の竪 穴住居は最も時期の古いものが円形もしくは隅円 方形の平面形であり、時期が下るにつれ方形のプ ランに移行する状況が確認できる資料である。

次に出上遺物は弥生時代後期から中・近世にい たる多くのものがある。まず弥生時代後期から古 墳時代前期にかけてのものは、竪穴住居の覆土中 や包含層から良好な資料を得ている。これらの器 種は壺・甕・鉢・高杯・手づくね土器などがある。 また同時期とみられるものに石器がある。石器の 種類は和泉砂岩の河原石を用いた叩き石が多くを 占めるが、粘板岩系の石材を用いた砥石やサヌカ イトの剝片などがある。このほか奈良時代頃の須 恵器や土師器、12世紀から13世紀頃の輸入陶磁器 である中国製の白磁碗や青磁碗・皿、瓦器碗、江 戸時代の肥前系陶磁器や堺擂鉢などが若干量出土 している。



A区全景 写真 2



円形竪穴住居



堤をもつ炉

4. 調査の方法と経過

(1)調査の方法

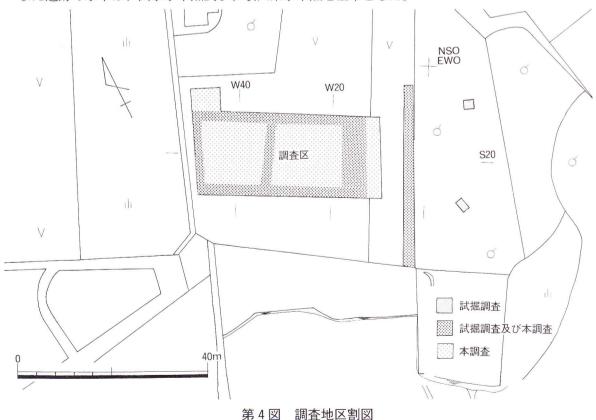
調査地は丘陵上のほぼ頂上部に位置し、現況は休耕田であった。調査は、試掘トレンチの一部を踏襲し、南北17m、東西39mの調査区を設定して行った。また、調査区の東に隣接する南北39m、東西2mの試掘トレンチについても、引き続いて調査を行った(第4図)。

調査の方法は、試掘調査で得られた資料をもとに遺構面直上まで重機により掘削を行い、一部に 残る包含層と遺構の調査を人力掘削によって実施した。さらに竪穴住居や溝等の遺構の掘削につい ては、土層堆積観察用のベルトを直交するライン上に設け写真撮影し、2層以上の堆積が確認でき たものについては実測図等の記録保存を行った。上層の色調及び土質の観察については、農林水産 省農林水産技術会議事務局監修『新版標準上色帖』を使用した。

遺物包含層の遺物の取り上げは、平面実測のための基準をもとに、4m単位で行った。遺構出土の遺物については、各遺構ごとに層位順に取り上げを行った。

調査区の全景写真撮影については、調査区の東西にそれぞれ高さ9mの櫓を設置して実施した。 次に、図面による記録は仮原点(NS0・EW0)を調査区の南東部外に置き、調査区にほぼ沿った 方向を仮Nとし、任意に割り付けを行った。この結果、試掘トレンチの東壁がW1mのラインに相 当し、磁北は今回の仮N方向から約27°西に振っている。平面図及び土層堆積状況図はすべて手実 測で行い、基本的に1/20の縮尺で実測図を作成したが、重要な遺物出土状況図や特殊遺構について は1/10の縮尺を用いた。

また遺跡の水準は、国家水準点及び和歌山県水準点を基準とした。



— 6 —

(2)調査の概要

調査地は丘陵頂上部の南東端に位置し、南および東に向かって傾斜をもった地形をなす。また、W12mのライン付近で開墾による段が生じるため、遺構が大きく攪乱された状況であった。調査区の中央から西部にかけても遺構面の削平が著しく、今回検出した竪穴住居の覆土はほとんど残っていない状態であり、竪穴住居のプランは壁溝の痕跡によって確認できた。そのため上層の堆積は一様ではなく、当調査地の基本層序は、試掘トレンチ東壁および調査区南壁、調査区西壁の土層断面実測図からそれぞれ作成して掲載した(第5図)。

上層の堆積は薄く、地表から約30~40cm下のところで遺構面を検出することができた。また土層の堆積は北に向かうほど希薄になる。地表から遺構面までの土層は、4層に分層することができる(写真5参照)。まず、第1層は2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂であり、約20cmの厚みをもつ。現代の耕作土である。次に、第1層直下の一部で旧床上とみられる10YR6/6(明黄褐)粗砂混シルトが約6cmの厚みをもって堆積しており、第2層とした。これは、主に調査区の南東部にみられたものである。調査区の西部では、第1層の下に2.5Y6/4(にぶい黄)粗砂混シルト層が6cmの厚さでほぼ水平に堆積し、これを第3層とした。その下層である第4層は10YR5/3(黄褐)細砂混シルト層であり、これもまた調査区の南西部の一部に堆積したものである。第3層および第4層は、出上遺物から近世以降の堆積層とみられる。今回検出した遺構面は、第4層の下面に相当する。遺構面は一面だけであり、弥生時代から江戸時代にかけての遺構が同一面上で検出できた。遺構面のベースである第5層には遺物は含まれず、自然堆積層となる。

検出できた遺構は主に、弥生時代後期から占墳時代初頭にかけての竪穴住居7棟、掘立柱建物2棟、奈良時代の掘立柱建物2棟、土坑1基、鎌倉時代の掘立柱建物2棟、江戸時代に埋没したとみられる井戸が1基である。竪穴住居については、円形のものが2棟、方形のものが5棟ある。また、特に弥生時代後期の円形の竪穴住居であるSB-6については、遺構の範囲の大半が調査区外におよぶため、北へ幅6m、長さ5mの拡張区を設けて調査を行った。

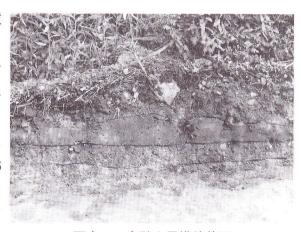
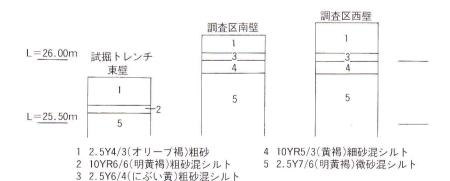


写真 5 南壁土層堆積状況



第5図 調査地土層柱状模式図

5. 遺構

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居や掘立柱建物などがほとんどである。弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけての竪穴住居が調査区の東部に集中し、一部は調査区西部で検出することができた。掘立柱建物は古墳時代や奈良時代、鎌倉時代のものであり、調査区の中央から西部に認められた。このほか、竪穴住居に伴うとみられる溝状遺構や柵列、奈良時代の土坑、江戸時代に埋没したとみられる井戸を検出している。調査区の中央部分ではピットを多数検出しており、調査区全体で検出できたピットの数は、掘立柱建物としてプランを確認したものを合わせて219個である。ピットの時期については古墳時代前期のものがほとんどであり、若干奈良時代や鎌倉時代のものが含まれる(第7図)。

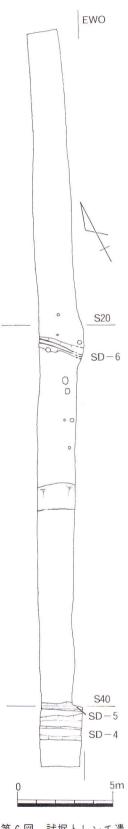
まず竪穴住居については、全部で7棟検出している。そのうち円形プランの竪穴住居が2棟(SB-4・SB-6)、方形プランの竪穴住居が5棟(SB-1~SB-3・SB-5・SB-7)である。円形プランの竪穴住居は弥生時代後期後葉、方形プランの竪穴住居は古墳時代前期のものである。竪穴住居については今回特に、一辺が8.5mの規模をもつ県下でも最大級の規模をもつ方形の竪穴住居(SB-1)を検出することができた。方形の竪穴住居のうち、ベッド状の施設をもつもの(SB-1・SB-2)や、周壁に支柱とみられる柱穴をほぼ等間隔に廻らしているもの(SB-1)など、特殊な構造が認められる。さらに調査区西部で検出した柵列(SA-1・SA-2)は古墳時代前期のものであり、SB-7と方向性を同じくするためSB-7に伴う遺構である可能性がある。

次に掘立柱建物は、全部で 6 棟検出している。遺構の時期については古墳時代前期のものが 2 棟(SB-8・SB-9)、奈良時代のものが 2 棟(SB-10・SB-11)、鎌倉時代のものが 2 棟(SB-12・SB-13)である。

古墳時代前期の掘立柱建物は、梁行1間、桁行3間のもの(SB-8)や梁行2間、桁行4間のもの(SB-9)がある。SB-8については梁行の長さが4.0mあるため、本来2間であったが遺構面が削平されているため柱穴が消失したとみられる。

奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物については、建物の規模が明確にわかるものは奈良時代のものが 1 棟(SB-11)のみで、梁行 2 間、桁行 3 間である。鎌倉時代の掘立柱建物であるSB-12は、柱穴の規模等にばらつきがみられるが、柱間の間隔からみて梁行 2 間、桁行 2 間以上の建物と考えられる。

このほか主な遺構には、奈良時代の土坑、江戸時代に埋没したとみられる井戸がある。奈良時代の土坑(SK-2)はSB-1の北西隅と重なりをもち、南北4.0m、東西 $0.9\sim1.0$ mの規模を測る。深さは検出面から13cmである。



第6図 試掘トレンチ遺 構全体平面図

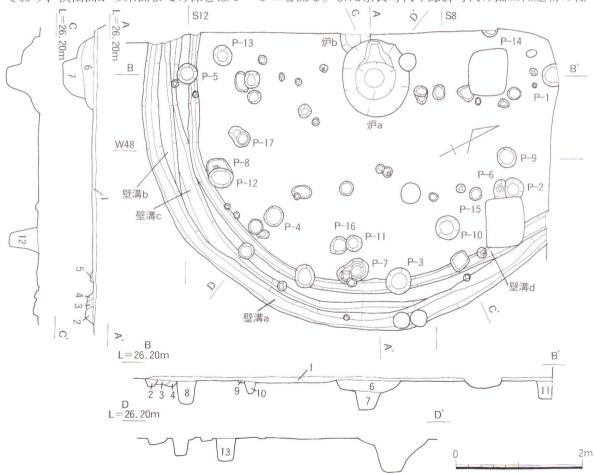


覆土は単層であり、須恵器の細片や塼が出土している。井戸(SE-1)は調査区の南東端に位置する。 素掘りの井戸であり、検出面から2.6mの深さをもつ。段状に掘削され、遺構の中央が円柱状に狭くなる。遺構の範囲が調査区外におよぶため平面プランは把握できないが、検出した範囲においては方形のプランを呈する。覆土中には遺物をほとんど含まず、土師器と磁器の細片が微量出土したのみである。覆土の状況からみて人為的に埋め戻されたとみられる。

試掘トレンチにおいては、主な遺構として弥生時代後期に機能していたとみられる溝状遺構を2条(SD-5・SD-6)と、鎌倉時代の溝状遺構(SD-4)を検出している(第6図)。SD-4・SD-5はトレンチの南端で、SD-6はトレンチ中央で検出した東西方向に走る溝状遺構である。SD-6は調査区内で検出したSD-1と時期、方向性を同じくするため、同一の遺構とみられる。

(1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構

SB-6(第8図) SB-6は円形のプランを呈する竪穴住居であり、調査区の北西隅に位置する。遺構の範囲は調査範囲外におよぶため、検出できたのはプランの約1/2である。遺構はすでに削平されており、検出面から床面までの深さは $5\sim8$ cmを測る。また奈良時代や鎌倉時代の掘立柱建物の柱



- 1 2.5Y4/1(黄灰)粗砂混シルト
- 2 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト
- 3 2.5Y4/1(黄灰)粗砂混シルト
- 4 2.5Y5/2(暗灰黄)粗砂混シルト
- 5 2.5Y6/4(にぶい黄)細砂混シルト
- 6 10YR4/1(褐灰)粗砂混シルト 遺物・炭を多く含む
- 7 10YR3/1(黒褐)細砂混シルト 炭を多く含む
- 8 2.5Y4/2(暗灰黄)細砂混シルト
- 9 10YR4/1(褐灰)粗砂混シルト 黄色土ブロックを含む
- 10 10YR5/2(灰黄褐)粗砂混シルト
- 11 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト
- 12 2.5Y3/1(黒褐)細砂混シルト
- 13 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト

第8図 SB-6遺構平面及び土層断面図

穴により、床面が攪乱された状況である。2.5Y4/1(黄灰)粗砂混シルトの覆土をもち、弥生土器の細片を多く含む。壁溝が4条廻るため、3回の拡張による建て替えが認められる。最後に拡張による建て替えを行った住居をSB-6aとし、新しいものから順にSB-6b、SB-6c、SB-6dと呼称して調査を行った。

まずSB-6aは、復元すると直径7.6mの規模であり、幅22~30cm、深さ7~11cmの壁溝をもつ。主柱穴を5個(P-1~P-5)確認しており、本来8本柱であったとみられる。

次にSB-6bは、復元すると直径7.4mの規模である。主柱穴は3個(P-6~P-8)確認しており、本来は7本柱であったとみられる。主柱穴のうちP-7からは、比較的残りの良い弥生時代後期の土器 (第15図、 $1 \cdot 6 \cdot 10$)が出土している。

SB-6cは、復元すると直径7.2mの規模を測る。壁溝はSB-6bの壁溝に切られている。主柱穴は P-11~P-13であり、復元すると8~9本柱であったと推測される。

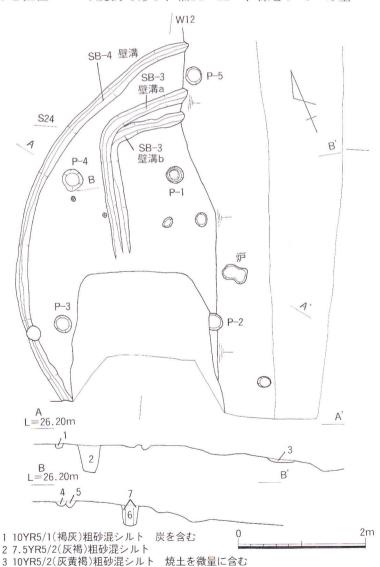
SB-6dは住居の原型である。復元すると直径6.6mの規模であり、幅14~22cm、深さ4~6cmの壁

溝をもつ。主柱穴は $P-14\sim P-17$ であり、復元すると $6\sim 7$ 本柱であったとみられる。

またSB-6aからSB-6cの主柱穴の 規模が直径30~40cm、深さ40cm前後 であるのに対し、SB-6dの主柱穴は 直径20~30cm、深さ20cm前後と小規 模である。主柱穴の数も拡張による 建て替え以前には6本であったもの が拡張後には8~9本と増加し、拡 張とともに主柱穴の規模も拡大する 傾向にある。

炉については新旧2つの炉を検出している。炉aは住居のほぼ中央に位置し、長径1.2m、短径1.0mのやや楕円形である。床面からの深さは50cmの規模を測る。炉の掘方は段状をなす。その覆土は2層に分層することができ、下層に炭を多く含む。炉bは炉aに切られ、また遺構のプランが調査外におよぶため正確な規模は不明である。深さは床面から14cmであり、2.5Y4/1(褐灰)粗砂混シルトの覆土をもつ。

SB-4(第9図) SB-4は調査区の



5 10YR5/1(褐灰)粗砂混シルト 7 10YR5/2(灰黄褐)粗砂混シルト

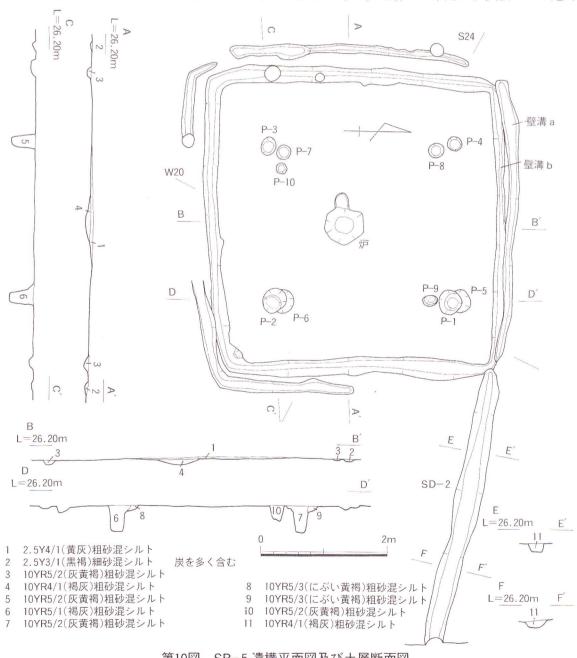
第9図 SB-3・4遺構平面図及び土層断面図

6 10YR5/1(褐灰)細砂混シルト

4 10YR5/2(灰黄褐)粗砂混シルト

南東端で検出した弥生時代後期後葉の竪穴住居であり、円形のプランを呈する。後世の開墾やSE-1によって遺構の大半を失っており、さらにSB-3によって床面は削平されている。幅16cm、深さ $6\sim8$ cmの壁溝をもち、復元径は7.4cmを測る。 3 個の主柱穴(P-3 \sim P-5)より、本来8本柱の住居 であったとみられる。住居の中央部分には長径40cm、短径20cmの炉を検出している。炉は後世の開 墾による削平が著しく、深さは残存部分において7 cmである。覆上には微量ではあるが焼上を含む。 拡張等は認められなかった。

SB-5(第10図) SB-5は調査区の南東部に位置し、SB-1~SB-4に隣接している方形プランの竪穴 住居である。すでに床面は削平を受け、覆土は中央部分に若干残されるのみであった。壁溝の痕跡 によって遺構のプランを検出したものである。覆上の残存状況から、この住居と隣接するSB-2(第 13図)と同様にSB-5はベッド状遺構をもつ住居の可能性がある。壁溝が2条廻り、拡張による建て



第10図 SB-5 遺構平面図及び土層断面図

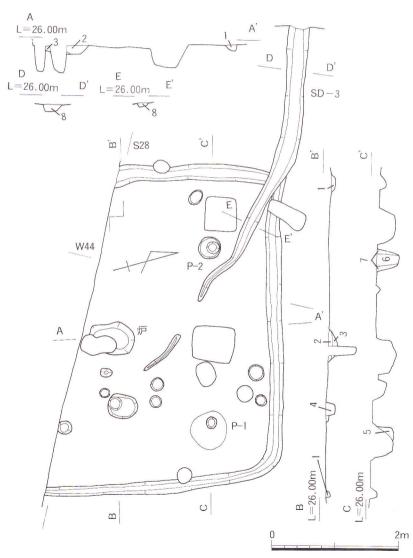
替えが認められる。拡張後の住居をSB-5a、以前のものをSB-5bとし、調査を行った。

SB-5aは東西5.0m、南北5.1m、SB-5bは東西4.6m、南北4.6mの規模を測る。SB-5aの主柱穴 $(P-1\sim P-4)$ およびSB-5bの主柱穴 $(P-5\sim P-8)$ はともに4個確認している。主柱穴の周辺にも規模、 覆土の酷似する柱穴(P-9・P-10)を検出しており、支柱の可能性が考えられる。炉は中央に一つあ り、拡張後も同じ炉を使用したとみられる。覆上は単層であり、炉の底面は黒変している。また、 SB-5aの壁溝の北東隅から東に向かってのびるSD-2は、遺物からSB-5と同時期のものである。覆 土も壁溝の覆土と酷似しており、SB-5に伴う可能性が高い。

SB-7(第11図) SB-7は調査区の南西端で検出した古墳時代前期の方形プランを呈する竪穴住居 である。住居の規模は東西5.1m、南北は調査区外により不明であるが3.8m以上となる。検出状況 は遺構検出面においてすでに幅20cm前後の壁溝が現れ、後世の開墾等による削平によって床面を含 めた覆土が失われていた。また奈良時代や鎌倉時代の柱穴が多数重なりをもつ。この住居の構造は

北側の壁溝から約1mの住居 内において検出した2個の主 柱穴(P-1 · P-2)より、本 来4本柱の住居であった可能 性が高い。住居のほぼ中央に は東西50cm、南北70cm、検出 面からの深さ12cmを測る炉を 検出している。また炉の北側 から住居の北西隅を貫き西に のびるSD-3は、遺物からSB -7と同時期のものであり、S B-7に伴う溝状遺構の可能性 が高い。このSD-3は東から 西に緩やかに下る傾斜をもち、 覆上は壁溝の覆土と酷似して いる。

SB-1(第12図) SB-1は調 査区東端で検出した方形の大 型竪穴住居である。この住居 は弥生時代後期の溝(SD-1) とSB-5からのびる溝状遺構 (SD-2)をそれぞれ切り、築 造されている。この状況から 古墳時代前期でも比較的新し いものである。住居の規模は 東側が攪乱や調査外にのびる



1 10YR4/1(褐灰)粗砂混シルト

2 10YR4/1(褐灰)粗砂混シルト

4 10YR4/3(にぶい黄褐)細砂混シルト

5 10YR4/3(にぶい黄褐)粗砂混シルト

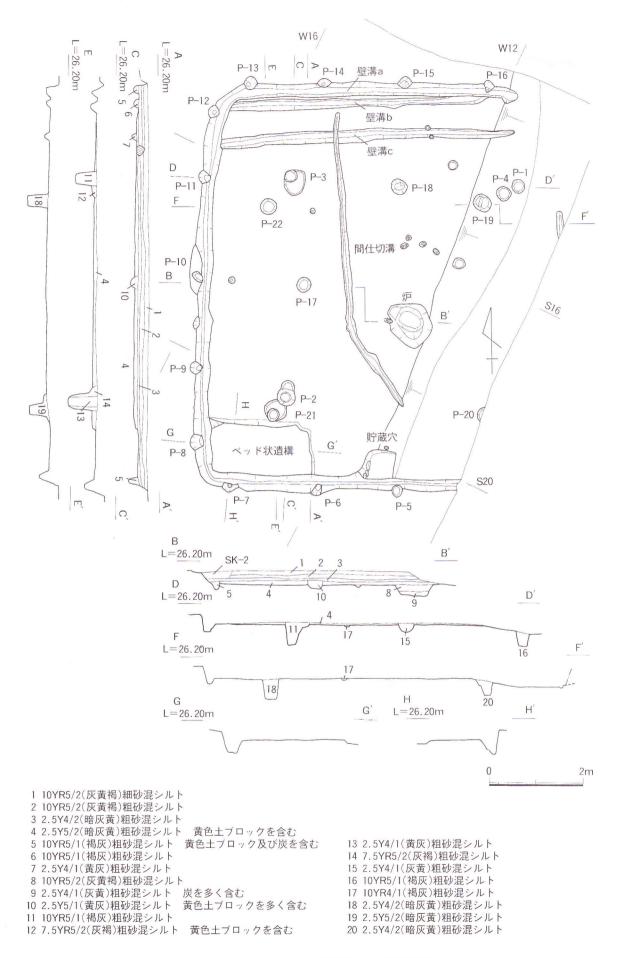
6 5Y5/2(灰オリーブ)粗砂混シルト

8 10YR4/2(灰黄褐)粗砂混シルト

第11図 SB-7 遺構平面図及び土層断面図

^{3 10}YR5/3(にぶい黄褐)粗砂混シルト 焼土を含む

^{7 10}YR4/2(灰黄褐)粗砂混シルト



第12図 SB-1 遺構平面図及び土層断面図

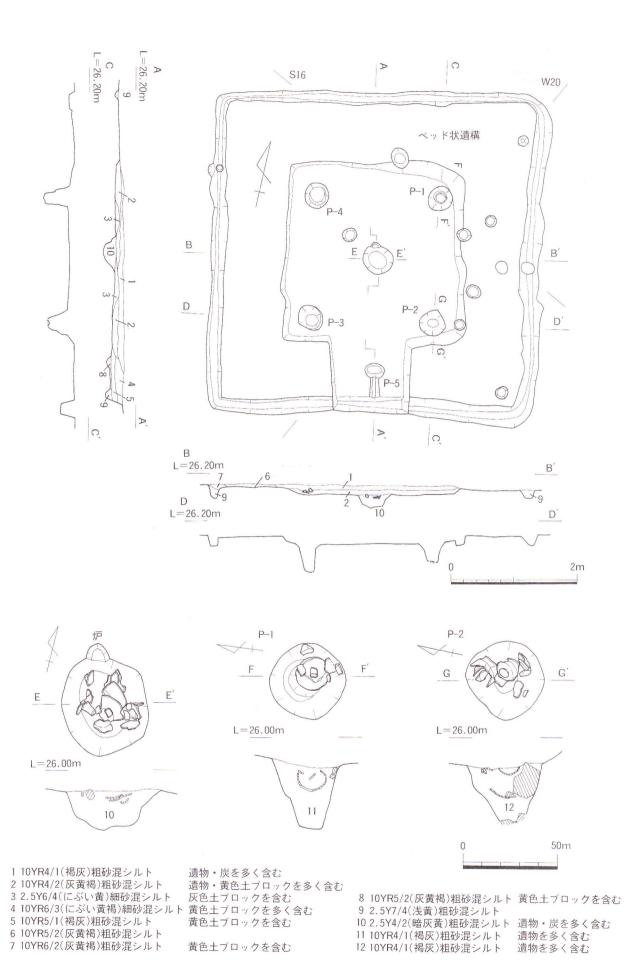
ため正確な大きさは得られていないが残存する壁溝より東西7.7mを測り、また南北は最も時期が新しい段階で8.6mを測る。この住居の覆土は大きく4層に分けられ、全体的に灰褐色系の色調をもつシルト質である。最下層の4層は上層と異なりベース状の黄色上ブロックを多く含む。この4層の上面がSB-1の最も新しい段階の生活面であり、 $P-1\sim P-3 \cdot P-17 \cdot P-18$ と周壁に沿う柱穴($P-5\sim P-16$)を検出している。この新段階の住居構造は床面より40cmから60cm掘り込まれた主柱穴($P-1\sim P-3$)より4本柱の住居とみられ、主柱穴間のほぼ中央に支柱($P-17 \cdot P-18$)をもつ。これらの柱によって梁を支えたとみられる。約2mの間隔をもつ周壁に沿う柱穴($P-5\sim P-16$)は垂木を支える支柱の可能性が高く、占い段階の周壁では検出されていない。またこの段階の炉は検出できなかった。

次に、4層下面の床面で検出したSB-1の古段階では北側に2条の壁溝b・cより拡張が行われたことが明らかである。この状況から南北幅は中段階で8.3m、古段階で7.6mをそれぞれ測る。これらの段階の柱穴は床面から40cm前後の深さをもつ4本の主柱穴(P-19~P-22)より4本柱の方形住居であったことがわかる。床面は北から南にかけて緩やかに下る傾斜をもち、南西の隅に東西2.1m、南北1.0m、床面からの高さ8cm程度のいわゆるベッド状の遺構が設けられている。住居のほぼ中央には90cm四方の不定形をなす炉を検出した。この炉は床面からの深さ約25cmを測る。また覆土は2層に分けられ、ともに灰黄色系のシルト質であるが下層に炭を多く含む。炉の西側には幅15cm程度の溝状遺構が南北方向に走り、炉を迂回する様に束側に屈曲する。この溝状遺構は壁溝cを切り、壁溝bとの間までのびることから中段階のものとみられ、間仕切り溝の可能性がある。このほか、南壁のほぼ中央部には東西60cm以上、南北60cm、床面からの深さ10cm前後の規模をもつ貯蔵穴が検出できた。この貯蔵穴内から叩き石(第20図、55)が出土している。

SB-3(第9図) SB-3は、SB-4と重なりをもつ方形の竪穴住居である。壁溝は2条確認しており、一度拡張による建て替えを行っている。遺構の南辺がSE-1によって壊され、遺構の範囲の東半分は後世の開墾によって攪乱されているため遺構の規模は不明であるが、一辺2.0m以上である。また床面の削平が著しく、覆土は失われていた。主柱穴は拡張後のものを2個(P-1・P-2)検出しており、本来は拡張前後ともに4本柱であったとみられる。

SB-2(第13図) SB-2は調査区東端で検出した方形の竪穴住居である。SB-1と近接しており、SD-1を切って構築したものである。東西5.2m、南北5.0mの規模をもつ。またSB-2は、南辺の入り口とみられる部分を除いて壁溝に沿って幅約1mのベッド状遺構が廻る。その結果、中央が約2m四方に窪んだ状態である。床面からベッド状遺構の上面までの高さは8~12cmあり、このベッド状遺構はベース面を掘り残してつくられたものである。検出時には住居の北半部がすでに削平され、ほとんどが壁溝とこの中央の窪みにのみ覆土が残された状態であった。覆土は5層に分層することができ、下層ほど土器の出土量が多くなる。また覆土の1層からは、刀子とみられる鉄器(第21図、59)が出土している。

主柱穴は4個(P-1~P-4)あり、ベッド状遺構の内側に設けられている。主柱穴は直径40cm、深さ30cmの規模をもつ。炉は住居のほぼ中央にあり直径50cmの規模をもつ。炉や主柱穴は住居廃絶時に柱を抜き取った後、壺や甕などの土器が投棄された状況であった。住居の覆土においても床面近くで土器が多量に出土するのことから、土器廃棄住居と考えられる。



第13図 SB-2 遺構平面図及び土層断面図

また入り口とみられる床面には、長径30cm、短径20cmの楕円形を呈するピット(P-5)と、さらにそこから幅15cmの溝状遺構が壁溝に向かって削除されており、梯子を設置するために設けられたものか、入り口の構造に伴う遺構と考えられる。

SB-2の出土遺物の様相から、古墳時代前期の竪穴住居の中で最も新しい住居とみられる。

(2) 奈良時代の遺構

SB-10(第14図) SB-10は梁行 2間(4.0m)、桁行 3間(4.6m)の規模をもつ掘立柱建物である。調査区の南西隅に位置し、磁北に対してN-17°-Eの方向性をもつ。柱間はA-A′間で西から186cm、202cm、B-B′間で北から164cm、102cm、200cmである。柱穴の掘方はほとんどのものが方形を呈し規格性がある。また柱穴は四隅のものほど規模が大きく、一辺が60~80cmを測る。柱穴からは、8世紀代の須恵器の細片が出土している。

SB-11 調査区の北西隅で柱穴を2個検出している。遺構の大半が調査区外におよんでい

1 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト 2 10YR5/1(褐灰)粗砂混シルト 3 10YR5/2(灰黄褐)粗砂混シルト 4 10YR5/6(黄褐)細砂混シルト 5 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト 6 10YR5/2(灰黄褐)粗砂混シルト 7 10YR5/6(黄褐)粗砂混シルト 8 2.5Y4/1(黄灰)粗砂混シルト

9 10YR5/2(灰黄褐)粗砂混シルト 10 2.5Y4/1(黄灰)粗砂混シルト 11 10YR5/6(黄褐)粗砂混シルト 12 2.5Y4/1(黄灰)粗砂混シルト 13 10YR5/6(黄褐)細砂混シルト 14 10YR3/1(黒褐)細砂混シルト 15 10YR5/6(黄褐)細砂混シルト 16 2.5Y4/1(黄灰)細砂混シルト 17 10YR5/1(褐灰)粗砂混シルト 18 10YR5/6(黄褐)細砂混シルト

第14図 SB-10遺構平面図及び土層断面図

るが、掘立柱建物の南東隅に相当する。柱間は東西2.0mである。SB-11は柱穴の掘方が方形をなし、SB-10と同じ方向性(N-17°-E)をもつためSB-10と同じ時期の建物と考えられる。

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、上部に堆積した近世以降の包含層にはほどんど遺物が含まれておらず、また近世以前とみられる開墾等による削平を受けていない竪穴住居などの遺構内出土の一括資料のみが良好な資料である。比較的出土量の少ない上部堆積層の遺物は須恵器・土師器・瓦器や輸入陶磁器である中国製の青磁・白磁、また肥前系の陶磁器、瀬戸・美濃系の陶磁器や瓦片などが出土している。

まず弥生時代後期から古墳時代前期の出上遺物は比較的残存が良好であった竪穴住居(SB-6・SB-1・SB-2)から出土し、特にSB-2は土器廃棄住居とみられ主柱の抜き取り穴や炉、覆土などから多くの遺物が出土している。またSD-1からも若干量の出土をみた。しかし、この時期の土器は残存が特に悪く、内外面の表面剝離が著しい状態であった。このため、バインダー溶液等を用いた応急的な保存処理を行い、一部であるが調整を留めることができた。

奈良時代の遺物はSB-1の上部で検出した土坑(SK-2)からわずかな須恵器、製塩上器に混ざり塼

の破片が一点出土している。また鎌倉時代の遺物は掘立柱建物の柱穴(P-163)や土坑(SK-4・SK-5)などから少量の出土があった。

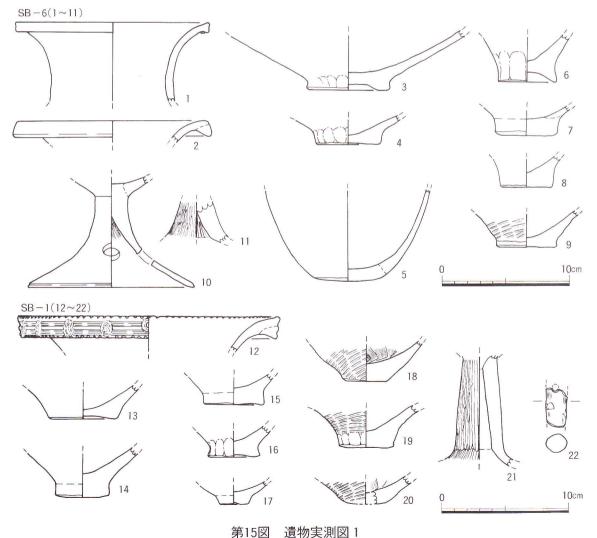
本書では、これらの遺物をまず時代ごとに分類し、さらに遺構ごとの一括資料を中心として記述し、さらに石器や鉄器のような特殊遺物は、最後にまとめた。

(1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺物

SB-6出土遺物(第15図、1~11) 1・2は広口壺の口縁部である。1は口縁部の復元径15.2cmを 測るもので、頸部から直に立ち上がり外上方に大きく開く器形を呈し、外端面に面をもつものである。2は口縁部の復元径14.6cmを測るもので、大きく開く口縁部に粘土を張り付け、端部を下方に 肥厚させている。

底部では上げ底状のもの(3・4・6・9)と平底状のもの(7・8)がある。特に6は脚台状に突出する。5はやや丸底状のもので胴部下半と底部との境が不明瞭である。この比較的特殊な器形は立ち上がりから壺の底部とみられる。底部径は最大のもの(3)で6.2cm、最小のもの(8)で3.8cmを測る。これら底部の調整は $3\cdot 4\cdot 6$ から底部周辺の外面に指頭による圧痕が顕著にみられるほか、9から外面にタタキ調整を施したのち底部周辺を指によるナデ調整を行っている。

10・11は高杯の脚部である。10は円形の透かし穴が四方に穿たれたもので、端部外面に沈線が一



条施されている。これらの調整は内外面ともに丁寧なナデ調整がみられるもの(10)、外面に丁寧な ヘラミガキ調整が施されているもの(11)があり、また両者の内面には絞り日痕が顕著に残る。

この住居からの遺物の胎土はほぼ均一で胎上中には石英や赤色軟質粒が含まれている程度である。 焼成はほとんどが不良であり、また色調は赤褐色を呈するものが多くをしめる。

これらの遺物のなかで1・6・10はSB-6の主柱穴P-7からの一括出土である。

以上の遺物の時期は弥生時代後期末の所産とみられる。

SB-1出土遺物(第15図、12~22) SB-1は住居の規模では最大のものではあるが出土遺物は比較的希薄であり、広口壺や高杯など図示できるものは数点である。

まず12は広口壺の口縁部であり、復元径20.2cmを測るものである。この壺は肥厚させた口縁部の上端部と下端部にそれぞれ刻み目が施されている。また外端面には2条の沈線がみられ、その上に円形の浮文によって加飾されている。

 $13\sim20$ はそれぞれ壺や甕の底部とみられる。これらの底部は、底部径 $2.0\sim5.0$ cmを測り、上げ底状のもの $(13\cdot15\sim17)$ 、平らなもの $(14\cdot18\sim20)$ などがある。底部の形状では特に突出するもの $(14\cdot16)$ やほぼ丸底状のもの(20)などがあり、ミニチュア上器のものか極端に小さい17がある。調整は、剝離が目立ち不明瞭であるが、 $18\sim20$ の外面にはタタキ調整がみられ、他にも指頭圧痕などが確認できるものがある。内面の調整では $15\cdot16$ からナデ調整がみられ、また18、20から蜘蛛の巣状ハケ目調整が観察できる。

21は高杯の脚部である。この高杯はほぼ垂直気味に下り、大きく「ハ」の字状に屈曲して接地するタイプのもので杯部との接合は円板充塡によるとみられる。調整は外面にヘラミガキ調整が施され、内面は指によるナデ調整による。

22は土錘である。径1.5cmを測る円錐状のもので長さ3.0cmのみが残存する。側面に穿たれた約0.5cm穿孔より棒状両孔式のものとみられる。

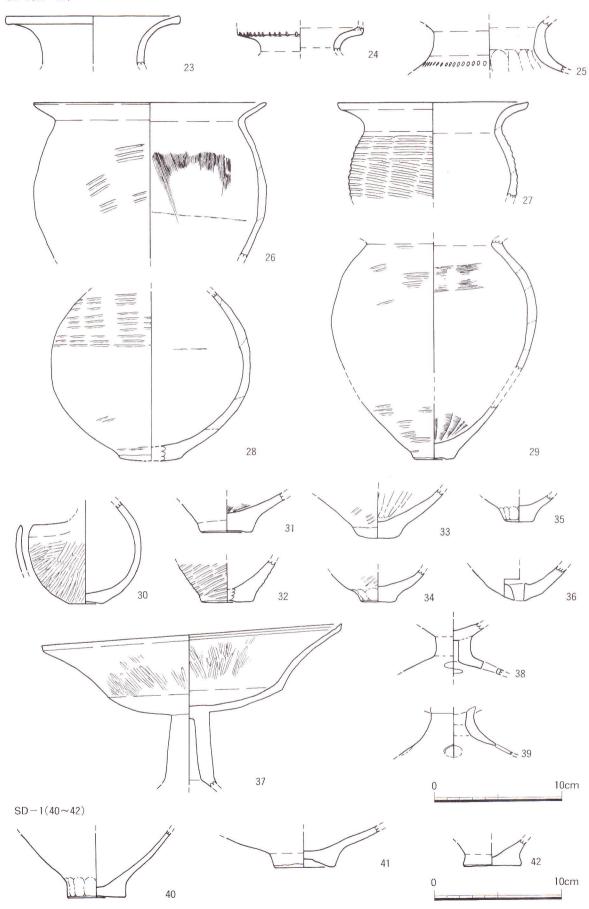
以上の遺物の胎上、焼成、色調はSB-6出上遺物と酷似するが、土錘(22)の胎土には片岩が含まれており紀ノ川南岸の所産とみられる。

これらの遺物からSB-1は庄内併行期でも中葉的な様相をもつと考えられる。

SB-2出土遺物(第16図、23~39) 23は口径13.6cmを測る広口壺の口縁部である。24は壺の頸部であり、斜上方に大きく屈曲した後直立気味に立ち上がる。口縁部は欠失しているが、いわゆる二重口縁壺の器形とみられる。この壺の屈曲部外面には刻み目が施されている。また25も同じく壺の頸部である。この壺は肩部に刺突文が施されている。

26・27は甕の口縁部から体部にかけてである。26は口径18.2cmを測り、口縁部は頸部から「く」の字状に大きく開く。27は口径14.8cmを測るもので口縁部はラッパ状に開き肥厚してのびる。両者はともに外面にタタキ調整が施されており、口縁部をヨコナデによって調整している。内面調整は26より細かい縦方向のハケ調整がみられ、指ナデによって先行するハケ調整が消されている。

28・29は体部から底部にかけてのものである。28は外面にタタキ調整が残るが指ナデによって消されており、球形に近い器形から壺の可能性がある。底部は比較的丸く作り出している。29は復元した器形から甕とみられ、やや上げ底状の底部をもつ。剝離した外面にはタタキ調整が残り、また内面には上部に横方向のハケ調整、底部周辺に蜘蛛の巣状ハケ目調整が観察できる。



第16図 遺物実測図2

30は口縁部が上方に彎曲する小型の手焙形の土器でる。外面は丁寧なヘラミガキ調整が施され、 口縁部をヨコナデによってシャープに仕上げている。

31~36は底部である。これらの底部は、底部径2.0~4.0cmを測り、平底状から丸底状のものが多くをしめる。36は底部中央に0.8cmの穿孔がみられることから甑の底部とみられる。これらの外面にはタタキ調整、指頭圧痕が顕著にみられ、また内面には蜘蛛の巣状ハケ目や指ナデによって調整されている。

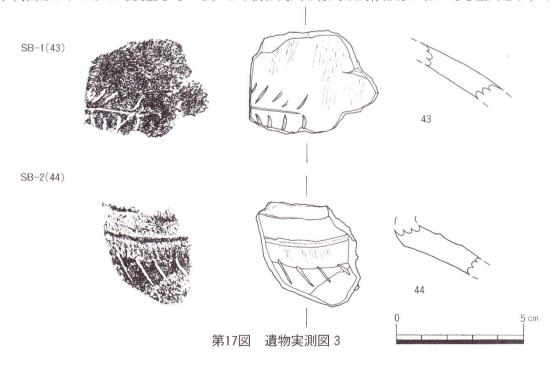
37~39は高杯である。37は杯部径23.6cmを測る大型の高杯で杯部のほぼ中間で屈曲して口縁部が形成される。口縁端部はシャープに作られ内面に一条の沈線がめぐる。杯部の調整は内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整が施されている。脚部はほぼ垂直に下り、欠失している部分は大きく外側に開き接地するタイプである。38・39はともに脚部の直立部が短いタイプのもので復元すれば円形の四方透かしをもつ。

このSB-2 出土遺物の多くは胎土に石英や赤色軟質粒が含まれている。しかし、28・29・31・33 には片岩粒が一定量含まれ、在地産の土器とは異なるものである。焼成はほとんどが不良であり、また色調は赤褐色を呈するものが多くをしめる。上器焼成は不良のものが多く、また色調はほとんど赤褐色を呈する。

以上の遺物からSB-2の時期は庄内併行期でも新しい要素をもち、布留式への過渡期にあたるものと考えられる。

SD-1出土遺物(第16図、 $40\sim42$) SD-1からの出上遺物は比較的希薄であり、良好なものに底部がある。 $40\sim42$ はともに底部径が4.0cmを超える比較的しっかりした作りのものである。これらの胎上や焼成はSB-6出土遺物と同様である。

線刻のある土器(第17図、43・44) 43・44はともに壺の肩部である。43はSB-1覆上の第1層から 出土したものであり、ヘラ状工具によって綾杉文風に線刻されている。外面はヘラミガキ調整を施 し、内面はナデによって調整している。この綾杉文風の線刻は残存部分においても全周せず、やや



乱雑に刻まれている。奈良県の唐古・鍵遺跡や四分遺跡では綾杉文風の文様帯を壺の頸部に一周させる例や、壺の胴部に記号文風に施す例があり、府中Ⅳ遺跡から出土したものはこの様な文様が退化したものとみられる。胎土の色調は内面が赤褐色を呈し、外面は黒褐色をなす。44はSB-2覆土の第1層から出土したものである。ヘラ状工具により、長さ1.2cmの左上りの斜線を等間隔に4本刻み、線刻は壺の肩部を全周するとみられる。頸部付近には粘土塊の剝離した痕が観察されるため、壺の頸部に突帯をもつものと考えられる。また突帯と器壁の接合面には、縦方向のハケによって約2cm幅の直線を横方向に1条削り出し、接着力を強化している。

43、44ともに弥生時代後期の所産である。

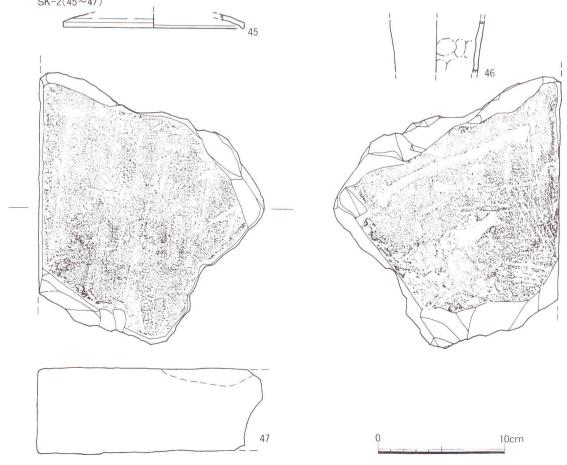
(2) 奈良時代の遺物(第18図、45~47)

今回掲載した奈良時代の遺物は、全てSK-2から出土したものである。

45は須恵器杯蓋である。かえりが退化し、器高も低い。復元口径14.4cmを測る。7世紀末から8世紀前半の所産である。

46は製塩土器である。胎土は精緻であり、外面が乳白色であるのに対し、内面は二次焼成によって赤変している。内外面ともに丁寧な横方向のナデによって調整しているが、内面には成形のための指頭圧痕が残る。46は丸底Ⅳ式に相当し、体部の形状から口縁部がラッパ状に開くタイプとみられる。

47は塼である。今回出土したものはその断片であり、出土したのは47の1点だけである。焼成は SK-2(45~47)



第18図 遺物実測図4

軟質であり、本来外面は炭素吸着により黒色化していたとみられるが、火災等による二次的な焼成によって淡赤褐色を呈す。厚さ7.0cmを測る。表面は丁寧なナデ調整によって平滑であり、一部に布日圧痕が認められる。裏面は表面に対しやや粗雑で、縄日のタタキ調整の痕跡が残る。側面は板状工具によるナデ調整によって整形している。また断面では、成形時の粘土塊のなじみが悪く、接合部分にヒビ割れが観察できる。胎上中には若干石英、赤色軟質粒を含むが精緻である。これらのことから47は、布を敷いた平坦な台の上に板状に成形した粘土塊を置き、上面を縄目の叩き工具を使って、側面を板状工具によって整形したとみられる。

(3)鎌倉時代の遺物(第19図、48~51)

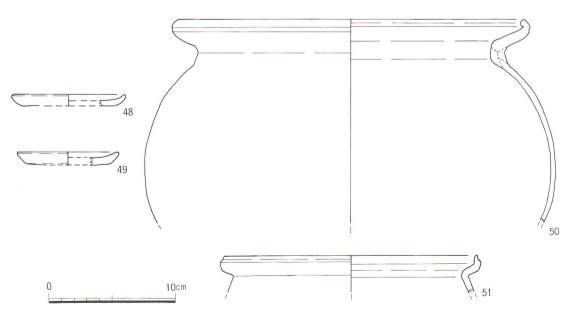
鎌倉時代の遺物は土師器皿(48・49)、土師器釜(50・50)などが出土している。

土師器皿(48・49)は小形のもので、器高の低いものである。48は口径9.0cm、器高0.9cmを測り、 淡赤褐色を呈するものである。内面にタール状のものが付着していることから灯明皿として用いら れたものと思われる。SB-12を構成する柱穴P-163から出土した。49は口径8.0cm、器高1.0cmを測 り、赤褐色を呈するものである。SK-4から出上した。48・49ともに指おさえ成形後ヨコナデ調整 で仕上げるものである。

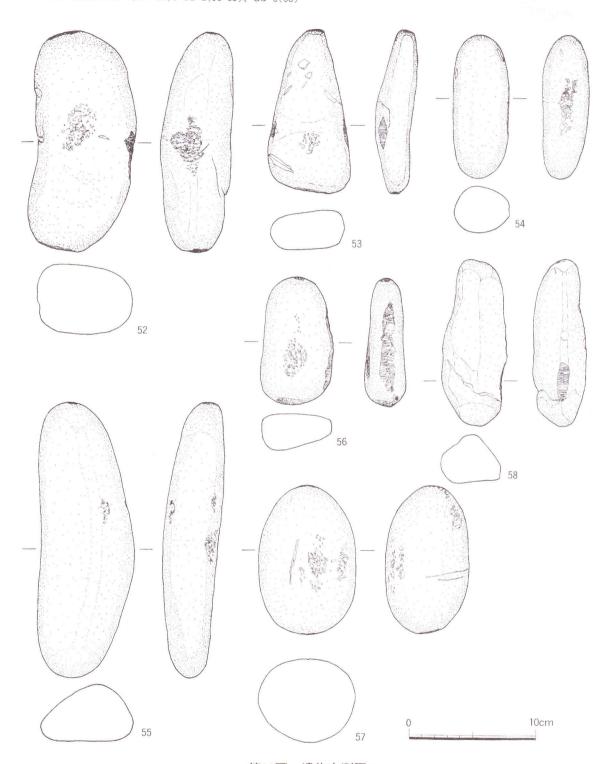
土師器釜(50・51)は赤褐色を呈するもので、外面にはススが付着するものである。口縁部はヨコナデ調整、内側面は当て具痕及びナデ調整痕がみられるものでる。50は口径28.2cm、胴部最大径32.4cm残存器高16.0cmを測るもので、口縁部を「く」の字状に外反させた後口縁端部を再び内側に折り返し丸く収めたものである。鍔をもたないものであると考えられる。51は口径20.6cm、残存器高2.9cmを測る。口縁端部を上につまみ上げるものである。50・51共にSK-5から出土した。

(4) 石器(第20図、52~58)

今回の調査において出土した明確な使用痕が観察できる石器は、叩き石(52~58)のみである。叩き石はすべて和泉砂岩の河原石を用いたもので、両端面や側面に明瞭な敲打痕が観察できるもので SB-12・P-163(48)、SK-4(49)、SK-5(50・51)



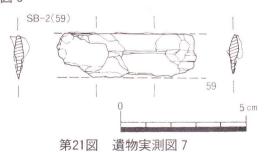
第19図 遺物実測図 5



第20図 遺物実測図6

ある。また石器に使用されたとみられる石材はサヌカイト片が一片出土している。

52はSB-6から出土した最大のもので、重さ1.22kgを量る。 $53\sim55$ はSB-1から出土したもので、特に55は貯蔵穴から出土している。 $56\cdot57$ はSB-2から出土したもので、なかでも56は重さ0.25kgを量る最小のものである。



— 24 —

また58は東側試掘トレンチ内のSD-6から出土したものである。

これらは出土地点などから弥生時代後期から占墳時代前期の所産と考えられる。

(5) 鉄器(第21図、59)

59はSB-2 覆土の第1層から出上したものであり、刀子とみられる。両端が欠損しており、錆化がすすみ原形を留めていない。幅1.7cm、厚さ最大0.3cmを測る。断面形がやや菱形をなすため、柄に近い部分とみられる。重さは7.55gを量る。

註

1) SB-1出土の線刻のある土器(43)の見解については、藤田三郎氏(奈良県田原本町教育委員会)の御教示を得た。 〔参考文献〕

佐原真 「弥生時代の絵画」 『考古学雑誌』第66巻第2巻 1980

佐原真 『弥生土器 I』 ニューサイエンス社 1983

寺沢薫・森岡秀人 『弥生土器の様式と編年』 近畿編 I 木耳社 1989

田原本町教育委員会「昭和62·63年度唐古·鍵遺跡第32·33次発掘調査概報」1989

橋本祐行 「弥生上器絵画研究の展望」 『東アジアの古代文化』 85号 1995

7. まとめ

(1) 弥生時代から古墳時代にかけての府中Ⅳ遺跡周辺の集落消長について

まず和歌山平野周辺の弥生時代前期に始まる集落では県下最大規模を誇る太田・黒田遺跡が知られている。この遺跡は弥生時代後期前半に一旦途絶えるが前期から古墳時代までほぼ連続する集落であることが発掘調査より明らかである。紀ノ川北岸では段丘上に所在する六十谷遺跡に前期の遺物が認められ、ほかの採集遺物から弥生時代の全期間を通して集落が営まれていたとみられている。

次に、弥生時代中期に始まる遺跡では、当遺跡から南東約2kmに位置する宇田森遺跡に集落が展開する。昭和42年に行われた発掘調査では、弥生時代中期中頃から後半の中央に炉をもつ円形竪穴住居が検出されている。また、近接する北田井遺跡は、弥生時代中期後半の竪穴住居をはじめ、後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居が確認され、安定して存続した集落であったことが明らかとなっている。これらの遺跡は標高8~10mの平野部でも微高地にあたり、農耕を基盤とする集落として良好な立地条件にあったといえる。

弥生時代後期初頭に始まり後期前半の一定期間に存在する遺跡として、北東約1kmに位置する標 高約100mの独立丘陵と丘陵から派生するいくつかの尾根(標高約60~80m)に所在する橋谷I遺跡・

竪	穴	住	居	 覧	表

住居No.	平頂	訂形	規模(m)	主柱穴の復元数	覆土(cm)	壁溝	炉	備考
SB-1a	力	形	7.7×8.6	4	24	0		最大規模の住居。周壁に沿う柱穴をもつ。SB-1cの拡張住居。
SB-1b	方	形	7.7×8.3	4	8	0	0	SB-1cの拡張住居。SB-1cと同じ構造。
SB-1c	方	形	7.7×7.6	4		0	0	貯蔵穴・単体のベッド状遺構・間仕切り溝?をもつ。
SB-2	力	形	5.2×5.0	4	20	0	0	上器廃棄住居。入り口・四方にベッド状遺構をもつ。
SB-3a	方	形	$1.5+\times 2.2+$	4		0		SB-3bの拡張住居。壁溝によりプラン確認。
SB-3b	方	形	$1.2+\times 2.0+$	4		0		壁溝によりプラン確認。
SB-4	FJ	形	径約7.4	8		0		壁溝によりプラン確認。削平を受けた炉の痕跡。
SB-5a	方	形	5.0×5.1	4		0	0	SB-5bの拡張住居。壁溝によりプラン確認。壁溝から溝状遺構が屋外にのびる。
SB-5b	力	形	4.6×4.6	4		0	0	壁溝によりプラン確認。
SB-6a	円	形	径約7.6	8	5	0	0	SB-6bの拡張住居。
SB-6b	円	形	径約7.4	7		0	\bigcirc	SB-6cの拡張住居。
SB-6c	円	形	径約7.2	8~9		0	0	SB-6dの拡張住居。
SB-6d	H	形	径約6.6	6~7		0	0	
SB-7	方	形	$5.1 \times 3.8 +$	4		0	0	壁溝によりプラン確認。住居内から溝状遺構が屋外にのびる。

橘谷II遺跡がある。これらの遺跡は、過去の調査より後期の円形竪穴住居跡が確認されており、いわゆる高地性集落であることが明らかとなっている。このような高地性集落は中期末に出現するもので、紀ノ川南岸の岩橋山塊の南方に位置する滝ヶ峯遺跡や千石山遺跡などが知られている。また岩橋山塊の東部に位置する奥山田遺跡は平地からの比高差13mの丘陵上に幅2~3 mの大溝を伴う後期前半の住居が検出され、高地性集落に関わる集落として指摘されている。ほぼ同時期の後期前半に位置づけられる平野部のやや微高地などに営まれた遺跡として先にふれた北田井遺跡や土器が多数出土した山口遺跡などが存在する。これらの遺跡と高地性集落との関わりが一つの問題点である。

古墳時代に入ると集落は平野部に広がりをもつ。弥生時代前期から継続して存在する集落では先述した太田・黒田遺跡や北田井遺跡、同じく中期から古墳時代を通して存続する岩出町吉田所在の吉田遺跡などが知られている。しかし、弥生時代後期になり集落が展開する遺跡として西田井遺跡や田屋遺跡があり、これらは古墳時代全般において盛行する。特に、田屋遺跡は古墳時代中・後期に規模が拡大する遺跡である。

このように、弥生時代中期に拡大し安定した集落は中期後葉の畿内第V様式において画期が訪れ、一旦途切れるものがある。その理由として一般的に一時的な軍事的緊張によると推定されている、いわゆる高地性集落が挙げられる。しかし、同時期に平野部に継続する集落が存在することも事実であり、この集落移動はその理由を気候の冷涼・湿潤化により低地集落の居住地が沼沢化したことによるものとも考えられている。

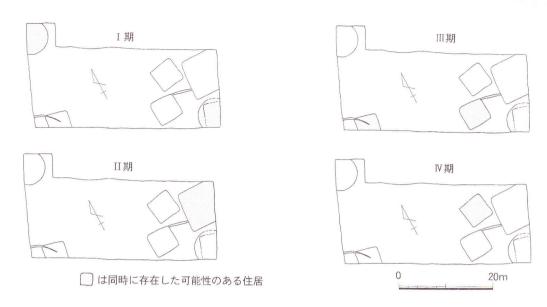
弥生時代後期末になると集落は平野部に移り、徐々に広がりをみせる。西田井遺跡や田屋遺跡がこれに当たる。府中Ⅳ遺跡は時期的には弥生時代後期後葉から古墳時代前期のいわゆる庄内併行期に限られる集落であるため高地性集落には後出し、平野部に出現する集落に併行する時期である。このことから、生産域と考えられる平野部から離れて丘陵上に集落を構えた府中Ⅳ遺跡は特殊な集落であることが推察できる。さらに、庄内期に続く布留式併行の住居をもつ集落は北田井遺跡や吉田遺跡などが存在するが比較的少なく、この時期に二つ日の画期が認められる。

(2) 府中Ⅳ遺跡検出の竪穴住居の構造と変遷について

府中IV遺跡は第1次調査より弥生時代後期の円形竪穴住居に良好な資料を得ていた。今回、古墳時代前期の方形竪穴住居を多数検出し、併せて連続する時期の住居形態を始め、集落構造を復元する資料を得たといえる。

第2次調査で検出した円形の平面形をなす竪穴住居SB-4及びSB-6の2棟は、削平により壁溝のみを検出したもの(SB-4)や調査区外にのびることより全体を明らかにできなかったもの(SB-6)である。このため、第1次調査の成果より円形の竪穴住居形態を検討すると中央に設けられた炉の周りにいわゆる炉堤をもつものが特徴的である。またその炉より屋外にのびる溝状の遺構は明らかに住居に伴うもので、排水溝に利用されたものと考えられた。このような構造は、炉堤では紀ノ川流域の円形住居に多くみられる施設であり、また溝状遺構では山地や丘陵上の住居にその特徴がみられるもので、壁溝からのびる場合もある。

次に、古墳時代前期に位置づけられる方形の平面形をなす竪穴住居は5棟を検出している。方形住居の一般的な規模及び構造は一辺5m前後のほぼ正方形で4本の主柱をもち、中央に炉を配するものである。今回検出の住居は削平によりすべてを明らかにしていないがSB-2より入り口部分を



第22図 府中Ⅳ遺跡における竪穴住居の変遷推定図

除く壁際にベッド状の高まりをもつものが特徴的である。またSB-5・SB-7より住居内や壁溝からのびる溝状遺構を検出している。これは第1次調査で検出した円形住居につながる構造とも考えられる。また特筆すべき住居に一辺が8mを超える大型住居SB-1がある。県下においてこれまで検出された最大級の規模の住居では円形のプランをもつもので吉田遺跡で検出された長径12.5m。短径

れた最大級の規模の住居では円形のプランをもつもので吉田遺跡で検出された長径12.5m、短径10.8mを測るものなどがあり、弥生時代中期後葉(畿内第 IV 様式)にあたる。しかし、方形のプランでは県下での報告例から吉田遺跡で検出された7.1×7.0mのもの(古墳時代前期)が最大級である。このことから、当遺跡で検出したSB-1は方形プランをもつもので、現在においては県下最大級の規模であることがわかる。さらに、この住居は新段階において周壁にくい込む柱穴がほぼ 2 mの間隔をもち検出している。この柱穴はおそらく垂木を支える支柱と考えられるが、同様の構造をもつ住居は紀ノ川流域では全く存在しない。この構造から特に大型住居に必要な構造の一つであり、住居空間がさらに広がるものと考えられる。弥生時代中期以降、住居の形態は北部九州の影響を多大に受けることが提唱されている。この住居は時期が下るものの九州域の影響を受けた可能性があるものといえる。

次に、竪穴住居の変遷はまず比較的遺物が豊富に出土したSB-6・SB-1・SB-2よりSB-6(弥生時代後期後葉) \rightarrow SB-1(古墳時代前期前葉) \rightarrow SB-2(古墳時代前期中葉)という流れが読みとれる。さらにSB-5に関するSD-2とSB-1との重なりからSB-5 \rightarrow SB-1が得られ、平面形や溝状遺構等の関連からSB-6=SB-4・SB-5=SB-7というグループが考えられる。この状況から、当遺跡における住居の変遷は4期に分けることができる。まず I 期は弥生時代後期畿内第 V 様式の新段階(SB-6・SB-4)、III 期は古墳時代前期庄内併行の古段階(SB-5・SB-7)、III 期は庄内併行の中段階(SB-1)、IV 期は庄内併行の新段階(SB-2)である。

[参考文献] 和歌山県史編さん委員会 『和歌山県史』考古資料 和歌山県 1983 和歌山市史編纂委員会 『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991 石野博信 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990 前田敬彦 『紀伊における弥生時代集落と銅鐸』『古代文化』第47巻第10号 (1995) 第37回埋蔵文化財研究集会実行委員会 『ムラと地域社会の変貌―弥生から古墳へ―』 埋蔵文化財研究会 1995

(3) 府中Ⅳ遺跡出土の塼について

今回の調査において、SK-2から塼が1点出上している。塼は古代において宮殿や寺院の敷設や壁、基壇積みに使用したものであり、塼が出上したことは古代寺院跡や官衙遺構の存在を窺わせるものである。府中Ⅳ遺跡周辺には直川廃寺や紀伊国府跡推定地があり、当遺跡はこれらと何らかの関係があるものと考えられる。

和歌山県において塼が出土している遺跡は、現在知り得る限りでは上野廃寺と佐野廃寺の2遺跡である。両者ともに7世紀後葉、白鳳時代の創建である。府中Ⅳ遺跡周辺においても遺跡から西へ約1kmの位置には直川廃寺がある。伽藍遺構は発見されていないが複弁八葉蓮華文軒平瓦等が出土し、瓦の年代から8世紀初頭の創建と考えられている。

次に紀伊国府跡については、遺跡の南方約250mを東西走する県道粉河加太線の北沿い、遺跡か ら北東約800mのところにある府守神社(現聖天宮)を中心とした地域が推定されている。これまで の研究では、国府跡と推定される要因として現在「府中」という地名が残っていることや、県道粉 河加太線が古代の官道の一つである南海道のルートとほぼ一致するものと考えられており、この地 が推定南海道沿いにあること、府中の地域が小高い台地上にあること、北から東へ10°方向の条里 が復元できるという点があげられている。国府跡推定地についてはこれまでに本格的な発掘調査は 行われていない。しかし、昭和44年に和歌山県教育委員会によって遺物分布調査および部分的なボー リング調査が行われている。調査の結果、国府に関連のある遺構は検出されていないものの府守神 社周辺では8、9世紀の遺物が比較的多く出土し、なかでも菱形叩目文をもつ平瓦片や陶硯片とみ られる須恵器が各一点出上している。紀伊国府の範囲については現在、寺西貞弘氏の推定南海道を 南限とし、復元条里の方向に即した東に10°の方向性をもつ六町四方のプランを想定する論や、中 野栄治氏の推定南海道を中心に南北に範囲をもち、同じく条里に即した六町四方の国府域を想定す る見解などがある。当時紀伊国府にどのような施設があったかについては『日本三代実録』元慶二 年(878)九月二八日庚申条の記事によると、国府の中心をなす「庁事」とそれ以外の「舎屋」、学校 と合わせて二十棟以上の官舎があり、その周辺には「百姓家」や国司たちが居住する「館」が存在 したことが窺える。

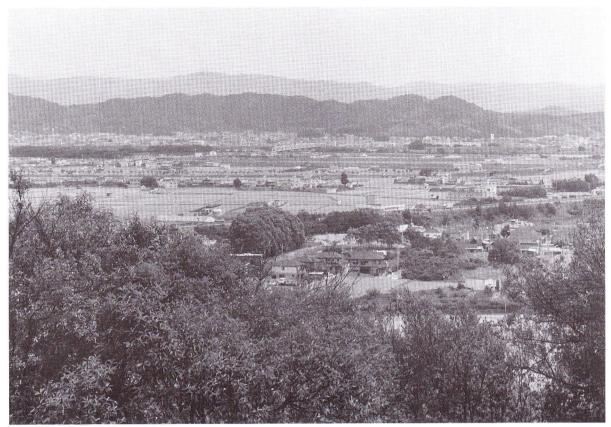
塼が出土した土坑のほか、今回の調査で検出できた奈良時代の遺構としては掘立柱建物が 2 棟ある。掘立柱建物は第 5 章で触れたとおり磁北に対して $N-17^\circ$ -Eの方向性をもち、真北に換算すると $N-11^\circ$ -Eとなる。したがって、掘立柱建物はほぼ復元条里の方向に即した方向性をもつこととなる。 国府跡が府中の地域に推定されるならば、調査地が国府推定地と近接していることや、復元条里に 即した掘立柱建物を検出していること、当遺跡から奈良時代の瓦が出土していないことなどから、 遺跡は古代寺院と関連のあるものというよりも、国府と関連のある施設である可能性を推定することができる。

[参考文献] 和歌山県教育委員会 『紀伊府中遺跡調査概報』 1969 寺西貞弘「紀伊国府遺構試論―その位置と規模について一」『和歌山地方史研究』和歌山地方史研究会 1981 和歌山県教育委員会 『上野廃寺跡発掘調査報告書』1986 高野口町教育委員会 『高野口町内遺跡詳細分布調査報告書』1989 中野栄治 『紀伊国の条里制』占今書院 1989 和歌山市史編纂委員会 『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991 和歌山県史編さん委員会『和歌山県史 原始・古代』 1993

報告書抄録

ふりが	な	ふち	ふちゅうよんいせきだい 2 じはっくつちょうさがいほう										
Tr.	名	府中	府中Ⅳ遺跡 第2次発掘調査概報										
副													
卷	次												
シリーフ	ズ名	和問	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書										
シリーズ	番号	第	第15集										
編 著 者	名	栗	栗本美香・北野隆亮・井馬好英										
編集機	関	財[財団法人和歌山市文化体育振興事業団										
所 在	地	76	〒640 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL0734-32-0012										
発行年月	J	西月	西曆 1996年12月20日										
ふりがな	ふり	がな	なコー		ド北絹		東 経	調査期間	調査面積	調査原因			
所収遺跡名	所収遺跡名 所 右		市町村	遺跡	*番号	コロ 小牛	* NI.	四 日. 郑 旧	(m²)	Drij 11.7/5 ZA			
spenka 府中IV spes 遺跡	和歌	山市			102	34° 15′ 46″	135° 13′ 40″	19960624 19960814	780	宅地造成			
所収遺跡名		種 別	主な時	主な時代		主な遺構		主な遺物		事 項			
府中Ⅳ 遺跡		集落	弥生時代後 古墳時代育 奈良時代 鎌倉時代 江戸時代		竪穴住 加立柱 溝6、	建物6、	弥生上器 上師器 塼、叩き石、刀子		古墳時代記型竪穴住居				

図 版



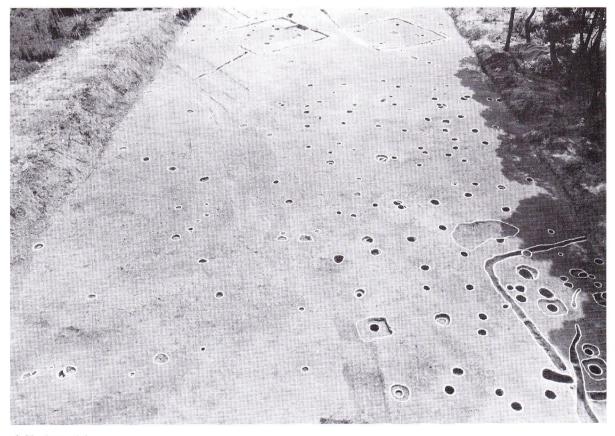
調査地遠景(北から)



調査前 (西から)



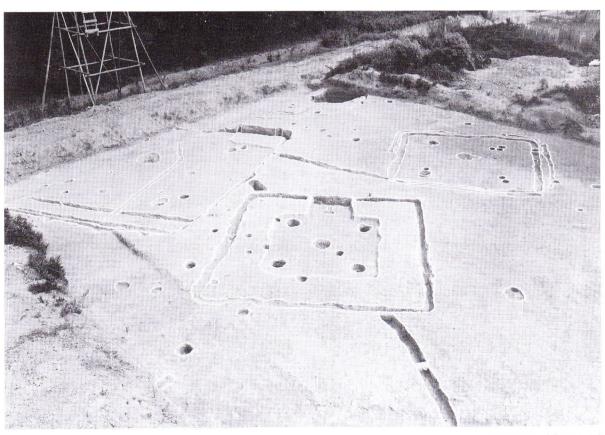
全景 (東から)



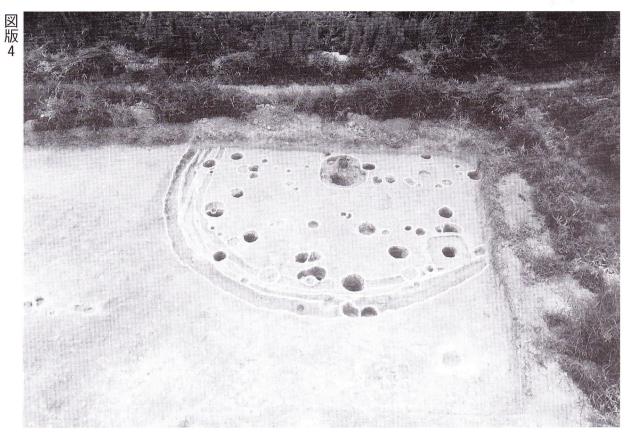
全景 (西から)



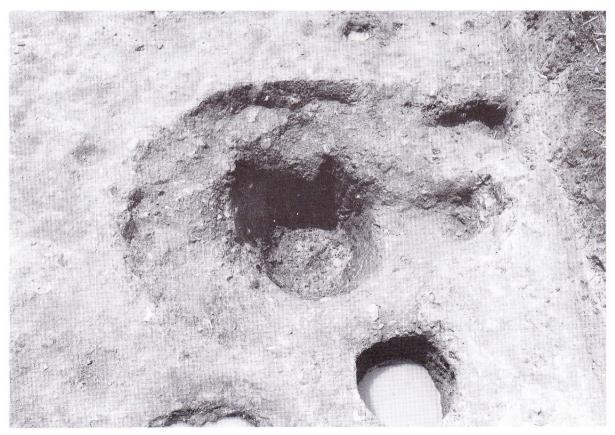
東側試掘トレンチ全景(南から)



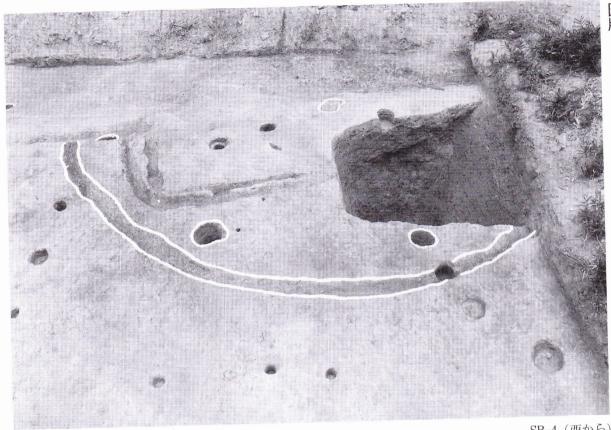
SB-2周辺 (北西から)



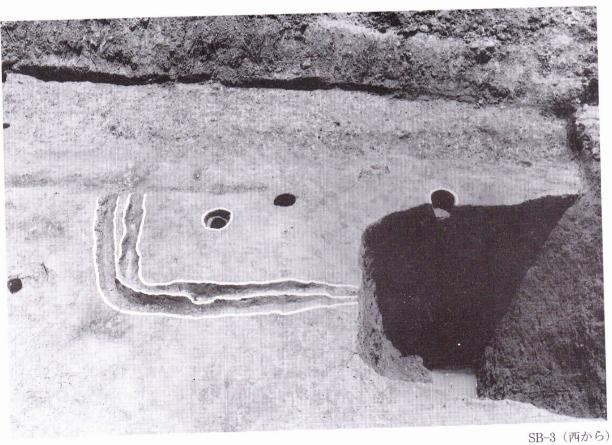
SB-6 (東から)

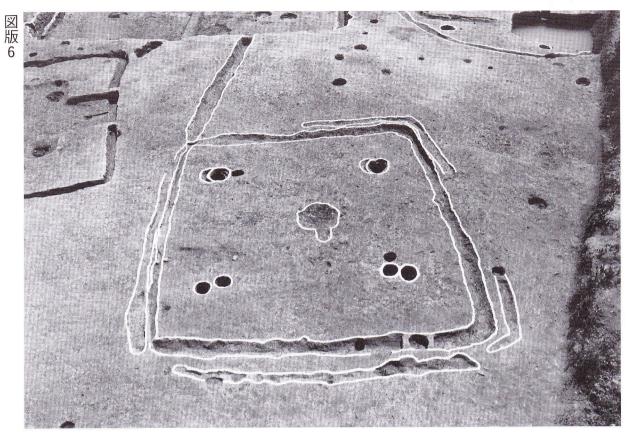


SB-6炉 (北から)

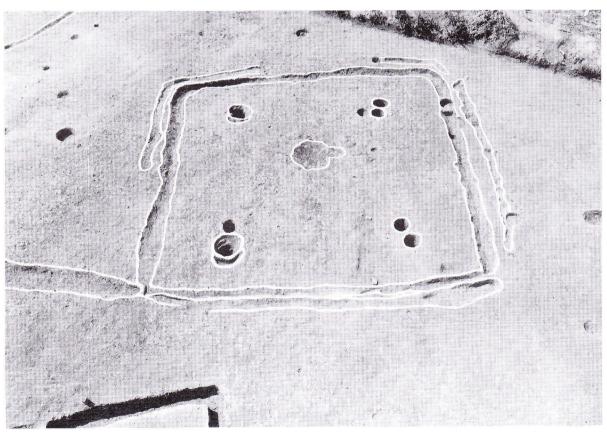


SB-4 (西から)

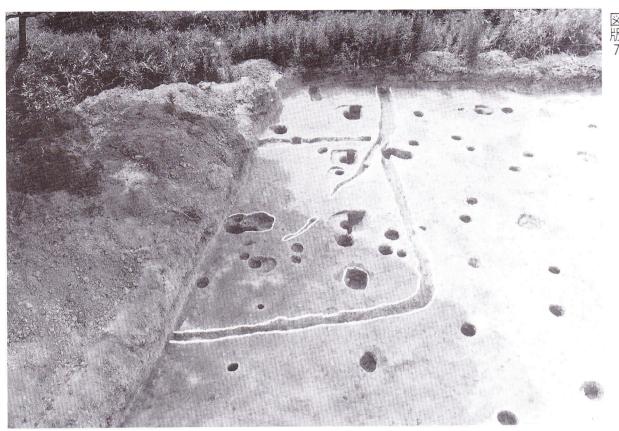




SB-5 (西から)



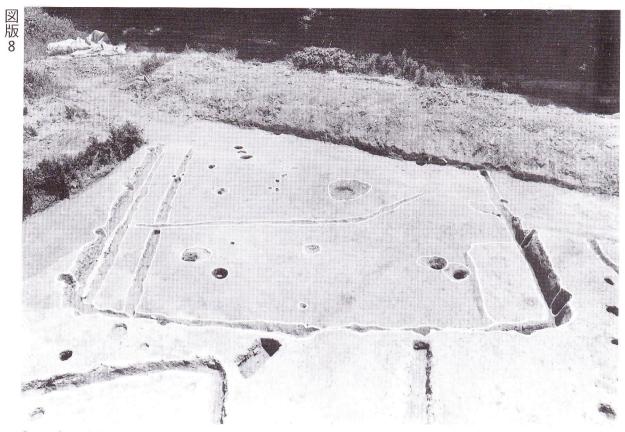
SB-5 (北から)



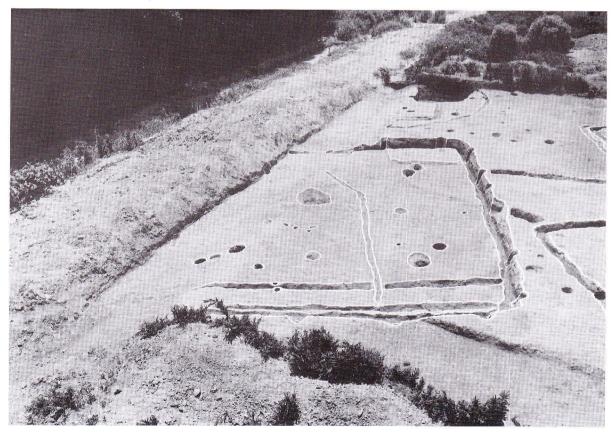
SB-7 (東から)



SB-7 (北から)



SB-1 (西から)



SB-1 (北から)

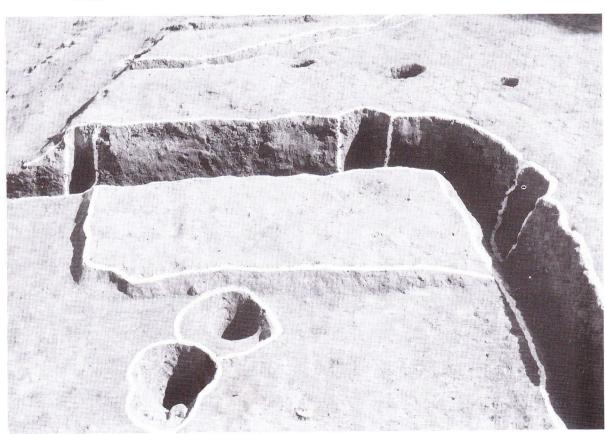


SB-1炉 (東から)

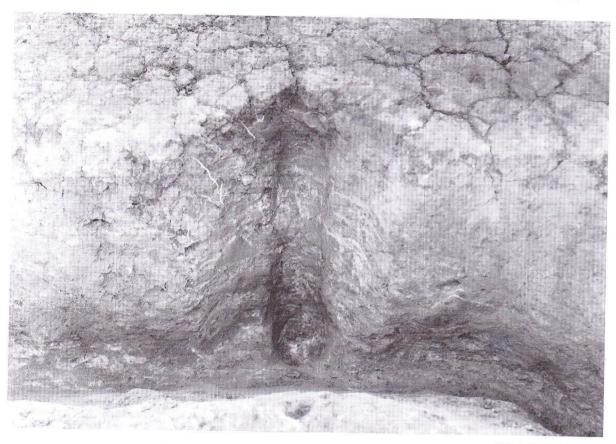


SB-1貯蔵穴(東から)

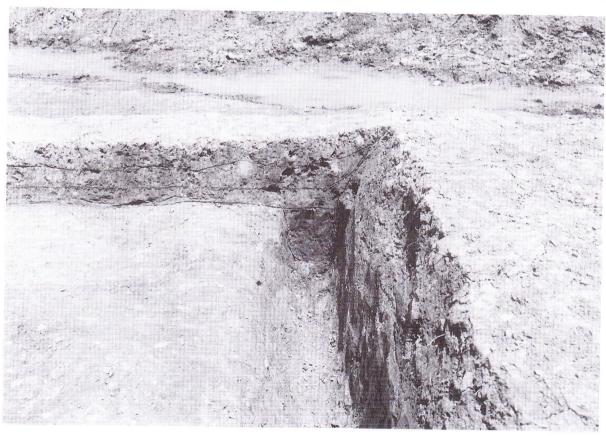
SB-1ベッド状遺構 (西から)



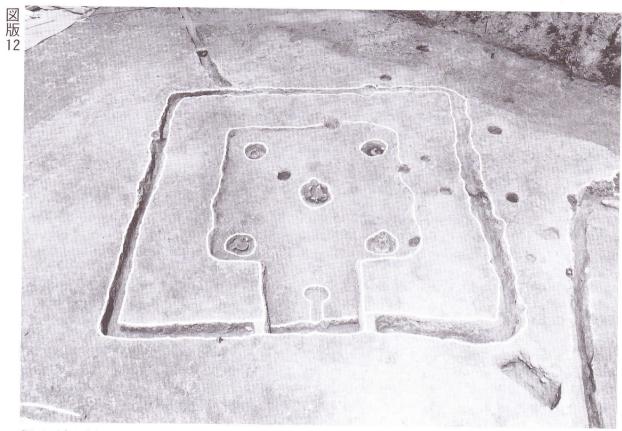
SB-1ベッド状遺構 (北から)



SB-1 P-7 (北から)



SB-1南壁溝 (西から)



SB-2 (南から)



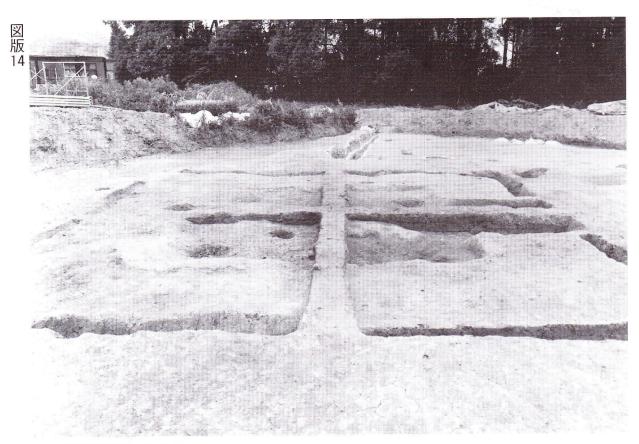
SB-2炉内遺物出土状況(南から)



SB-2 P-1遺物出土状況(上が南)



SB-2 P-2遺物出土状況 (上が東)



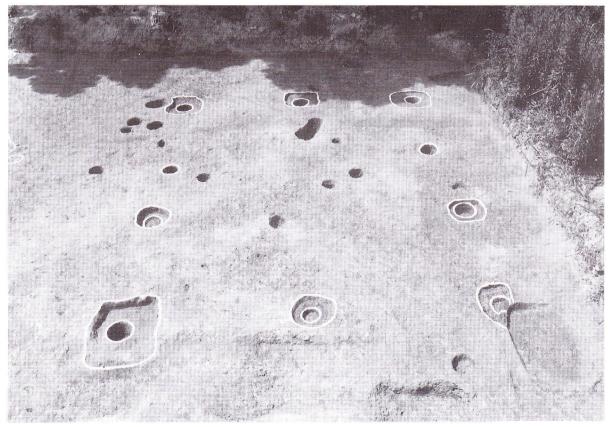
SB-2土層堆積状況 (西から)



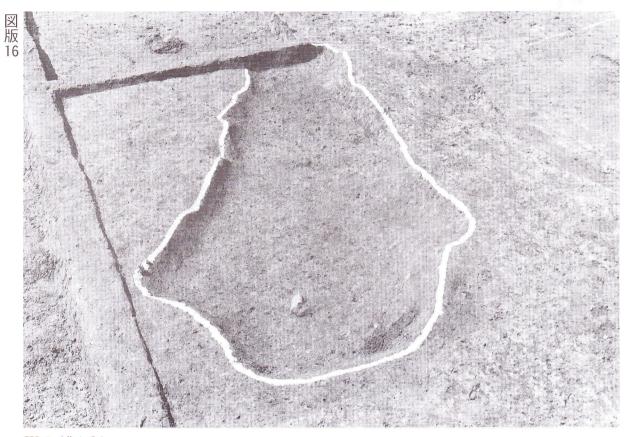
SB-2入口土層堆積状況 (西から)



SB-8 (南東から)



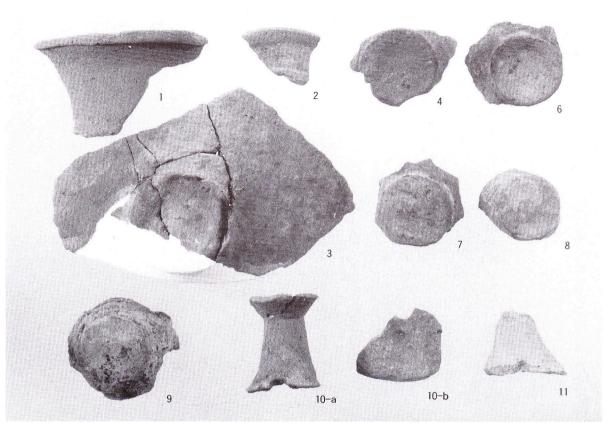
SB-11 (北から)



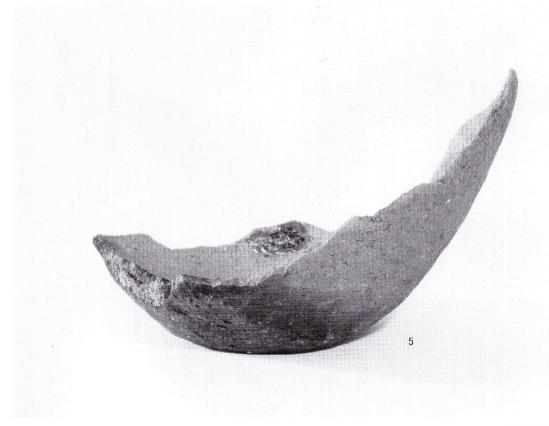
SK-2 (北から)



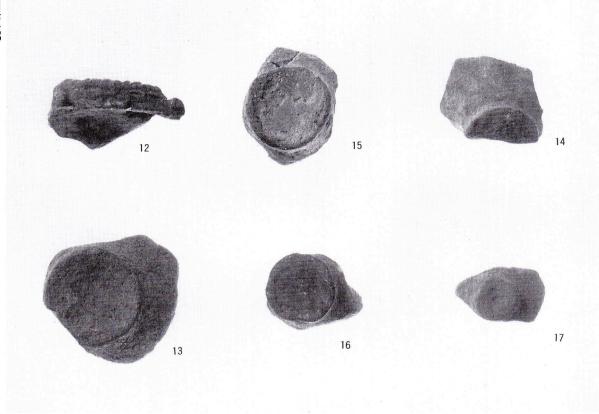
SE-1 (北から)



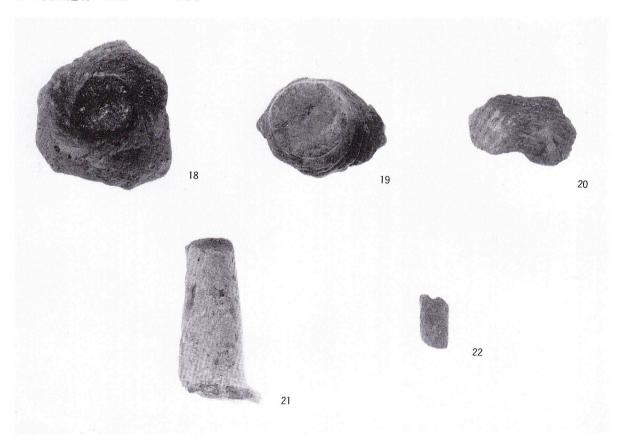
SB-6出土遺物 1·2壺 3~9底部 10·11高杯



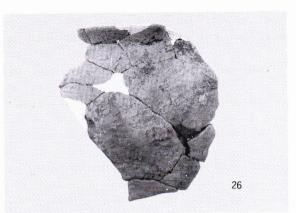
SB-6出土遺物 5壺



SB-1出土遺物 12壺 13~17底部



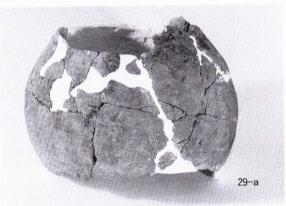
SB-1出土遺物 18~20底部



SB-2出土遺物 26甕



SB-2 P-3出土遺物 27甕



SB-2 P-1出土遺物 29甕



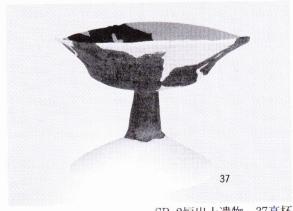
SB-2 P-1出土遺物 29甕



SB-2 P-4出土遺物 28甕?



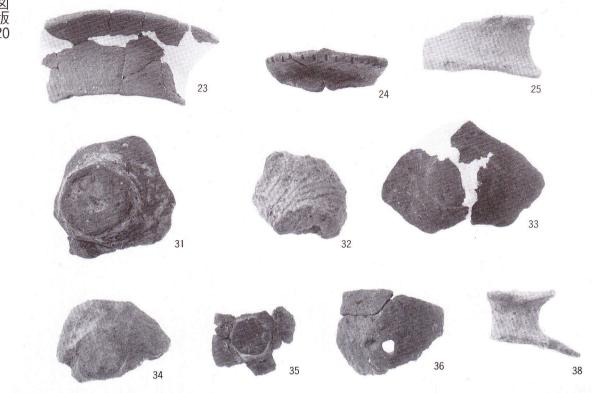
SB-2出土遺物 30手焙形土器



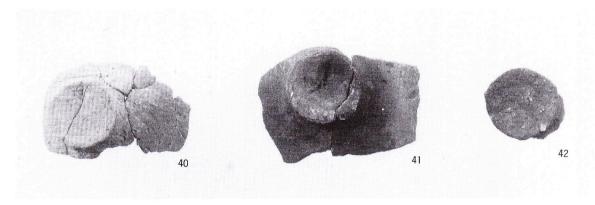
SB-2炉出土遺物 37高杯



SB-2出土遺物 39高杯



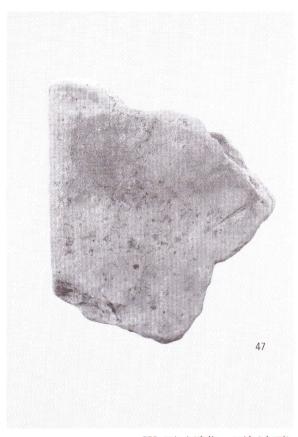
SB-2出土遺物 23~35壺 31~36底部 36甑 38高杯



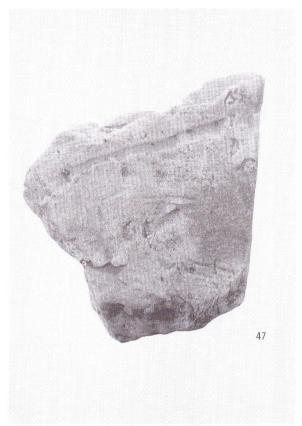
SD-1出土遺物 40~42底部



SB-1出土遺物 43線刻のある土器 SB-2出土遺物 44線刻のある土器 59刀子



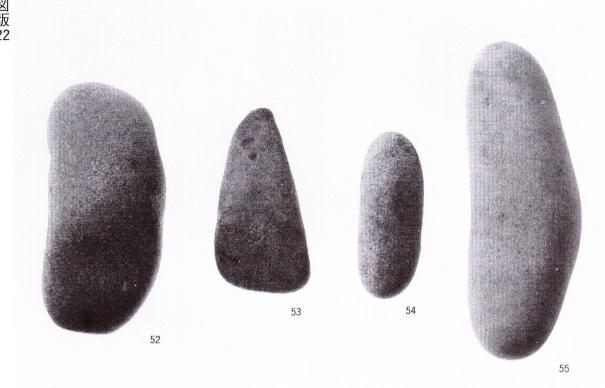
SK-2出土遺物 47塼(表面)



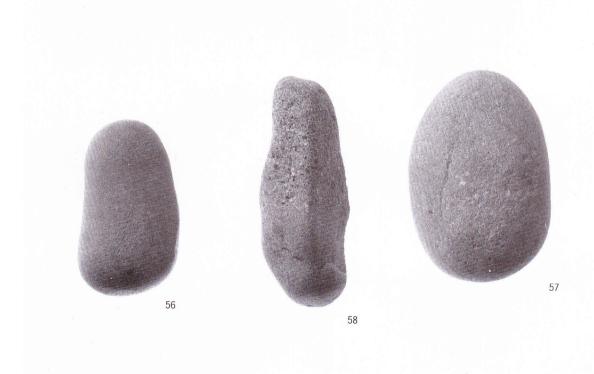
SK-2出土遺物 47塼(裏面)



SK-5出土遺物 50土師器釜



SB-6出土遺物 52叩き石 SB-1出土遺物 53~55叩き石



SB-2出土遺物 56·57叩き石 SD-6出土遺物 58叩き石

平成8年12月20日発行

府中Ⅳ遺跡 第2次発掘調査概報

編集・発行 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印 刷 中央印刷株式会社

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 1996

